

42390

教科書文庫

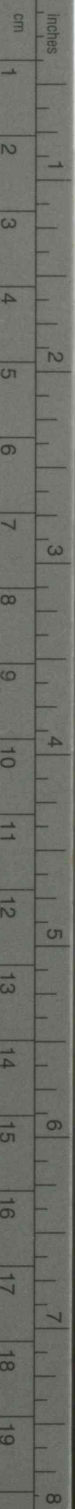
4
810
42-1938
20000
42082

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Y019
資料室

聖代女子國語讀本
吉田敦則編

一



日七十月一年三十和昭
濟定檢省部文
用科語國校學女等高
用科語國校學業實

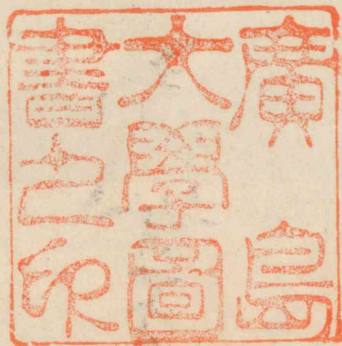
文學博士 吉澤義則編

聖代女子國語讀本

早稲書局刊

資料室

375.9
Y019



明治天皇御製

あゝみとすんさあ
ふ、大也、れい、ろ、よ、ま、あ、の、
心と、か、れ

教則謹書

明治天皇御製

あさみどりすみわたりた
る大空のひろきをおのが
心ともがな

義則謹書

聖代女子國語讀本 卷一 目次

一 日出づる國	松井簡治 一
二 伊勢參宮	五十嵐力 五
三 國花	芳賀矢一 九
四 菜の花と小娘	志賀直哉 四
五 朴の木	東郷彪 三
六 京人形に添へて(書簡)	金子薫園 六
七 新緑の奈良	荻原井泉水 三
八 童心	北原白秋 四
九 狗ころ	二葉亭四迷 四

一〇	山	寺	若山	牧水	弄		
一一	音	の	世界	宮城	道雄	六	
一二	奥村	五百	子	小野	賢一郎	三	
一三	日	の	岬	渡邊	霞亭	六	
一四	オリ	ン	ピ	ク	山川	建	三
一五	こ	の	一	躍	人見	絹枝	一〇
一六	天	恵	と	日本	藤原	咲平	二三
一七	夏	休		幸田	露伴	一〇	
一八	棟	の	花	吉村	冬彦	一四	
一九	天	の	河	山本	一清	一九	
二〇	青	磁	の	鉢	熊田	葦城	一五

二一	汝	の	母	姉崎	正治	一四		
二二	愛	國	心	大島	正徳	一五		
二三	兒	獅子	の	自覺	松村	武雄	一五	
二四	少年	時代	の	野口	英世	奥村	鶴吉	一三

—〔目次 終〕—



松井簡治
國文學者、文學博士、
東京文理科大學名譽
教授、千葉縣の人、
文久三年生。

○曙
○瞳

○魁
○燦爛

聖代女子國語讀本 卷一

一日出づる國

松井簡治

我が國は遠い昔から「日出づる國」と呼ばれてゐる。
日出づる國！ 嗚呼、なんと美しい名ではないか。東の
空が明け初めると、紫にまた紅に曙の雲がたなびき、静か
な波に洗はれて瞳々と朝日が昇る。その嚴かな、しかも
目覺しい姿が、我が國の名に呼ばれてゐるのである。嗚
呼、日出づる國！ なんと勇ましい名ではないか。
日の出は、夜の暗黒を破る點から文明の魁を示し、燦爛

思は。

○先頭に立つ

抱いて

大正天皇
御名は嘉仁、大正十
五年崩御、御年四十
八。
年々に
大正五年の御製。

平野國臣
通稱次郎、福岡藩士、
幕末の志士、元治元
年（三十四）歿、年四十
三。

として輝く光景から文化の全盛を思はせ、朝の第一の光
であるといふ事實から前途の希望を語つてゐる。
日出づる國の國民は、世界國民の先頭に立つて自らま
づ立派な國民となり、快活な心を以て自國の全盛を喜ぶ
とともに、益、その發展に力を盡くし、また常に前途に希望
を抱いて、元氣よく勉強を續けねばならぬ。

大正天皇が、

年々に我が日の本の榮行くも

いそしむ民のあればなりけり

と仰せられた御製、志士平野國臣が、

青雲のむかぶすきはみすめろぎの



皇紀二千五百九十七年
九月廿三日
平野國臣

〔筆山虎斐甲〕

富士の曙

みいつ

○連綿
戴いて

○現存
古い



日の出

みいつ輝く

御世になしてん

と詠んだ歌、いづれも日出づる
國の國民にとつて、最も大切な
教訓である。

神武天皇以來二千五百九十
餘年、連綿たる一系の皇室を戴
いて、順序正しい進歩を續けて
來た我が國は、世界現存のいづ
れの國家に比べても、最も古い
歴史を有つてゐる。歴史は古

大化の改新
孝徳天皇の御代、初
めて年號を定めて大
化と稱せられ、中大
兄皇子・中臣鎌足が
中心となつて新政が
行はれた。

○天壤無窮
若々しい

○諸子

○前途

い。しかしながら日出づる國の國民は常に若々しい心
を有つてゐる。大化の改新も、明治の維新も、皆この若々
しい心から生まれたのである。
日出づる國の國民は、常にこの若々しい心を以て、天壤
とともに窮のない國運の發展を期すべきである。殊に
諸子の如き前途ある小國民が、この心掛を以て、十分に身
體を錬り、道德を磨き、知識を廣めて行つたならば、我が國
民の前途は實にたのもしいものである。
嗚呼、日出づる國！ この美しく勇ましい名は廣い世
界にたゞ一つ、それは我が國にだけ附けられた名である。

二 伊勢參宮

五十嵐 力

五十嵐力
國文學者、文學博士、
早稻田大學教授、山
形縣の人、明治七年
生。

山田

三重縣宇治山田市。

五十鈴川

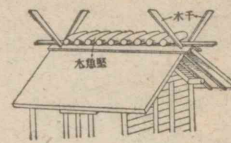
水源神路山、内宮の
神境を過ぎて二見の
海に入る、一名御裳
瀧川といふ。

宇治山田附近



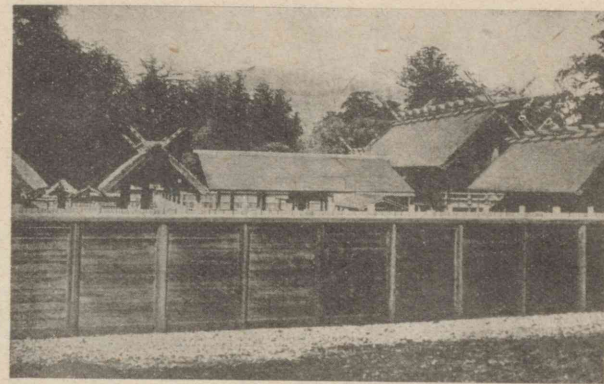
俄かに參宮を思ひ立つて、きのふの夕八時に東京を立
ち、げさ十時に山田に著きました。
まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神
神しさ、殊に内宮の畏さは言語に盡くせません。五十鈴
川の清き流に、水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく口すゝ
いで、それから頭上の鬱蒼と茂る木の枝を仰ぎ、名も知ら
ぬ鳥の奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、緑青色の苔にさ
びた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立竝んでゐ
る間をたどつて暫く進むと、やがて木立の奥、堀の彼方に

千木・堅魚木



〇神々しい

跪いて



千木・堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで塀の内に

入ると正面の御門には白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に揺られ、その奥にまばらに立つた神杉に護られて、御白石のびつしりと敷きつめられた間に、神しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さな祈を捧げました。さうして傍に竝んでゐた老爺や老婆が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を

宮 内

西行法師
鎌倉初期の歌人、建久元年(一一五〇)歿、年七十三。その歌に、「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなきに涙こぼるる」。思ひ。

〇極度

聞える

繰返すのに聴き入りながら、現の間に西行法師が、忝さに涙をこぼして額づいた、小さい敬虔な姿を思ひ浮かべました。直き清き強き心をあらはして

すく／＼立てりたふと神杉實際この御社の神杉は、樹木の神しさを極度に表したもののやうに思はれます。

私どもは内宮の御後の神杉の根方から一片の苔を採つて押戴いてふところにし、御手洗川にすゝいで、をりしも聞える



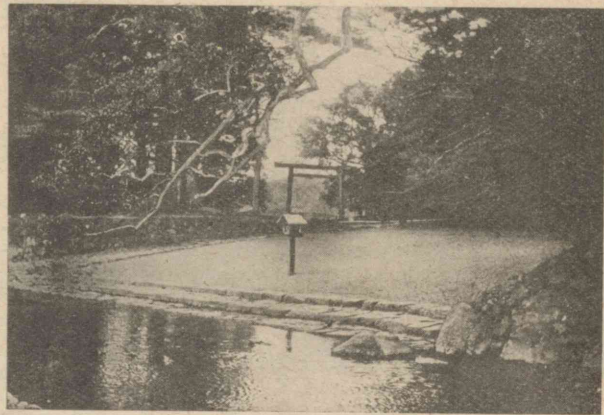
苑 神



笙
箏
宇治橋
五十餘川にかゝる。

五十九町
約六軒半。

朝熊岳
神路山の東北、山上
に朝熊神社がある。



川 鈴 十 五

笙・箏の幽寂な雅樂の音に送られて、この神境を辭しました。さうしてかへりみく、宇治橋を渡つて、昭憲皇太后の愛で聞し召したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて、田圃路の五十九町を志摩境の名山朝熊岳に走らせました。

御社の後の御門をろがみて
ひとかけの苔を戴き歸る

(我が書翰)

芳賀矢一

國文學者、文學博士、
東京帝國大學名譽教
授、帝國學士院會員、
福井縣の人、昭和二
年薨、年六十一。

爛漫

〇まがひ
〇固有

〇いはゆる

〇無數

〇楚々
〇野趣

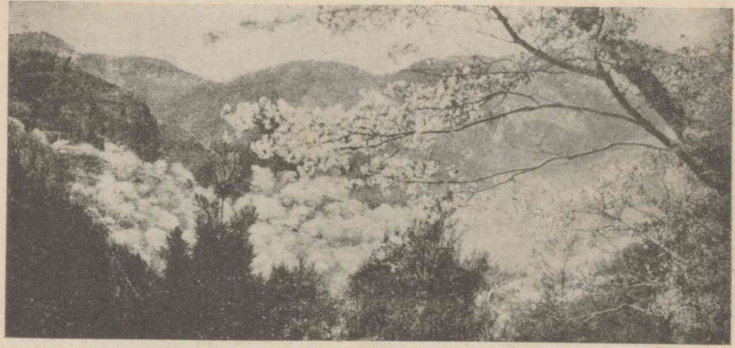
三 國 花

芳 賀 矢 一

我々日本人が國花として世界に誇るに足るものは櫻であらう。爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め、谷に満ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は、日本固有の美景である。櫻の花の色は極めてあつさりとしてゐる。しかし純白ではない。いはゆる櫻色である。その瓣は極めて薄い。一樹に無數の花を著けて、咲く時は一時に爛漫と残りなく咲く。上品な大宮人の風もあり、楚々たる野趣も添はつてゐる。空青く水清い日本の風土に最もよく釣合つて、深山都市、どこにあつてもよい。二十日草の長い

○一段の風趣
しまふ。

照りもせず
照りもせず曇りもは
てぬ春の夜の朧月夜
にしくものぞなき。
(新古今集)
○ふさはしい



吉野山の櫻

盛りもなく、薔薇の花の高い香氣も
ないが、空に知られぬ雪と降り散つ
ては、一段の風趣、再び世界を花の中
に包んでしまふのである。日本の
花の中の花は櫻である。
櫻の咲くのは春の半ばである。
春の日本は水蒸氣が多い。どんよ
りと曇つて、寒くもなく暑くもない
花曇、照りもせず曇りもせぬ朧月夜
雲霞とまがふ花には最もふさはし
い景色である。そよ／＼と面を吹

○駘蕩たり

○峻 巖

○微 塵

○はぐくまれる
際立つ

賀茂眞淵
國學者、遠江國(靜
岡縣)の人、明和六
年(西元)歿、年七十
三。

久方の
紀友則の歌。

○永陽の日

くや春風、春の特色はどこまでも駘蕩たる點にあり、溫和
な所にあり、峻巖猛烈といふ心の微塵もない所にある。
櫻はこの時候にはぐくまれて咲き出る花である。際立
つた特色のない所が即ちその特色である。

賀茂眞淵は

うら／＼とのどけき春の心より匂ひ出でたる

山櫻花

といつた。春の日は永い。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散
るらむ

櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。こゝに大宮

○悠揚迫らず

百敷の
山邊赤人の歌。

人の悠揚迫らぬ様子が想ひやられる。

百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ

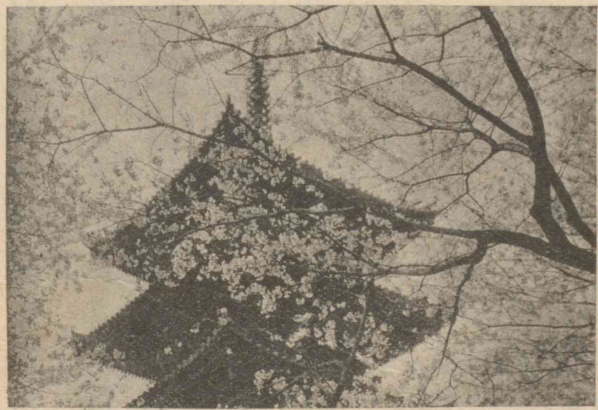
○牛車
かへる
○さながら

牛車の歩みおそく、花見てかへる黄昏の景、さながらの繪巻物である。

吉野山霞の奥は
八田知紀の歌。
吉野山
奈良縣吉野郡に在る。

吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

これは満山花に包まれた吉野山の景色である。



上野の櫻

花の雲

松尾芭蕉の句。

上野
東京市下谷區上野公園一帯の地、其中に東叡山寛永寺がある。

浅草

東京市浅草區浅草公園一帯の地、其中に金龍山浅草寺がある。

鐘一つ

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春。(榎本其角)

○賞翫する
○愛でる

花の雲鐘は上野か浅草か

これは鐘一つ賣れぬ日もなき大都會の花に掩はれた光景である。

櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫する花ではなくして、木として賞翫する花である。否、多くの木を集めて、人は唯花中に在つて賞翫する花である。上から見て愛でる花ではなくして、下から眺めて愛でる花である。

春風四月、日本人はしばし花の世界の人となるのである。

(月雪花)

志賀直哉
小説家、宮城縣の人、
明治十六年生。

菜の花



やうな

四 菜の花と小娘

志賀直哉

或晴れた静かな春の日の午後でした。一人の小娘が山で枯枝を拾つてみました。やがて夕日が新緑の薄い木の葉を透して赤々と見られる頃になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持ち出して、そこで自分の背負つて来た荒い目籠に詰め初めました。ふと小娘は誰かに自分が呼び掛けられたやうな気がしました。「えゝ」小娘は思はずさう言つて起つてそのあたりを見廻しましたが、答へる者はありませんでした。二三度そんな氣がして、始めて氣が付くと、それは雑草の中からたゞ一本僅

かに首を出してゐる小さい菜の花でした。

小娘は頭にかぶつてゐた手拭で顔の汗を拭きながら、「お前、こんな所でよく淋しくないのね」と言ひました。

「淋しいわ」と、菜の花は親しげに答へました。「そんなら、なぜこゝに來たの。」小娘は叱りでもするやうな調子で言ひました。すると、菜の花は、「雲雀の胸毛に著いて來た種が、こゝでこぼれたのよ。困るわ」と、悲しげに答へました。そして、「どうか私をお仲間の多い麓の村へ連れて行つて下さい。」と頼みました。小娘はかはいさうに思つて、菜の花の願を叶へてやらうと考へました。そこでそれを靜かに根から抜いて、手に持つて山路を村の

言ひ
答へ

沿うて

○歩調

○當惑
○圖らず

○宣告
やうに

方へと下つて行きました。

路に沿うて清い小さい流が水音をたててみました。暫くすると、菜の花は、「あなたの手は随分ほてるのね。熱い手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ。眞直にしてゐられなくなるわ。」と言つて、うなだれた首を、小娘の歩調に合はせて、力なく振つてみました。小娘はちよつと當惑しましたが、圖らずいゝ考が浮かびました。小娘は身軽く路端にしゃがんで、黙つて菜の花の根を流へ浸してやりました。「まあ。」菜の花は生き返つたやうな元氣な聲を出して、小娘を見上げました。小娘は宣告するやうに、「このまゝ流れて行くのよ。」と言ひま

さう

○さも

した。菜の花は不安さうに首を振つて、「先に流れてしまふところはいわ。」と言ひました。「心配しなくてもいいのよ。」さう言ひながら、小娘は手に持つてゐた菜の花を流の上に放してしまひました。菜の花は、「こはいわ、こはいわ。」と流の水にさらはれながら、見る／＼小娘から遠くなるのを恐しさうに叫びましたが、小娘が黙つて兩手を後へ廻し、背で跳る目籠を押へながら、駈けて來ますので、やつと安心しました。そして、さも嬉しさうに水の上から小娘を見上げて、何かと話しかけました。何處からともなく氣輕な黄色い蝶が飛んで來ました。そして、うるさく菜の花の上にまつはりついて飛びまし

しまひ。

た。菜の花はそれをも大變嬉しがりました。しかし蝶はせつかちで移氣でしたから、いつかまた何處かへ飛んで行つてしまひました。

○無愛想

菜の花は小娘の鼻の頭にほつくと玉のやうな汗が浮かび出してゐるのに氣が付きました。「今度はあなたが苦しいわ」と、菜の花は心配さうに言ひました。が、小娘は却つて無愛想に、「心配しなくてもいゝのよ」と答へました。菜の花は叱られるのかと思つて黙つてしまひました。

○悲鳴

間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花は流に波打つてゐる髪の毛のやうな水草に根を絡

○絡む

まれて、さも苦しげに首を振つてゐました。小娘は息をはずませながら、「まあ、少しさうしてお休み。」と言つて、傍の石に腰をおろしました。「こんなものに足を絡まれて休むのは氣持が悪いわ。」さう言ひながら、菜の花はなほ頻りにいや／＼をしてゐました。「それでいゝのよ。」と小娘は言ひました。「いやなの。休むのはいゝけれど、かうしてゐるのは氣持が悪い。どうかちよつと上げて下さい。どうか。」と、菜の花は頼みましたが、小娘は、「いいのよ。」と笑つて取合ひませんでした。が、そのうち、水の勢で菜の花の根は自然に水草からすりぬけました。そして、不意に「流れる。」と大きな聲を立てて、菜の花は

○取合ふ

かうして

急いで

また流されて行きました。小娘も急いで立ち上ると、それを追つて駈け出しました。

少し来たところで、「やつぱりあなたが苦しいわ。」と菜の花はこはく言ひました。「何でもないのよ。」と小娘も優しく答へ、そして、菜の花に氣を揉ませまいと、わざと、菜の花より二三間先を駈けて行きました。

麓の村が見えて來ました。小娘は「もうすぐよ。」と聲を掛けました。「さう。」と後で菜の花が答へました。

暫く話は絶えました。たゞ流の音に交つて、ばた／＼と小娘の草履で走る足音が聞えてゐました。

ちやほうんといふ水音が小娘の足元でしました。菜

見えて

答へ

絶え

動悸

の花は死にさうな悲鳴を揚げました。小娘は驚いて立ち止りました。見ると、菜の花は、花も葉も色が褪めたやうになつて、「早く／＼。」と伸び上つてゐます。小娘は急いで引上げてやりました。

「どうしたのよ。」小娘はその胸に菜の花を抱くやうにして、流を見廻しました。「あなたの足元から何か飛びこんだの。」と、菜の花は動悸がするので言葉を切りました。

「いぼ蛙なのよ。一度もぐつて不意に私の顔の前に浮かび上つたのよ。口の尖つた、意地悪さうな、あの河童のやうな顔にもう少しで私の頬つべたをぶつけるところでしたわ。」と言ひました。小娘は大きな聲を立てて笑ひ

○笑ひ事

ました。「笑ひ事ではないわ。」と、菜の花は怨めしさうに言ひました。「でも、私が思はず大聲を立てたら、今度は蛙の方でびつくりして、あわててもぐつてしまひましたわ。」かう言つて菜の花も笑ひました。

間もなく村へ著きました。小娘は早速それを自分の家の菜畑に外の菜の花と一緒に植ゑてやりました。そこは山の雑草の中とは違つて、土がよく肥えてゐますので、菜の花はどん／＼伸びて育ちました。そして、今では大勢の仲間と仲よく仕合はせに暮せる身となりました。

(荒 絹)

植 肥
ゑ 〇

東郷 彪
東郷大將の息、侯爵、
貴族院議員、内匠寮
御用掛、東京の人、
明治十八年生。
舊 邸
東京市麹町區上六番
町の邸。
ゐよう

五 朴 の 木

東 郷 彪

舊邸の庭に、二三本の朴の木がある。もう四五尺の高さになつてゐようが、この朴の木には妙な物語がある。それは父が、まだ舞鶴鎮守府司令長官をしてゐた時分、官舎の庭に一本の朴の大樹があつた。父はこの木を非常に愛して、

「朴の葉が青々と茂つてゐるのはよいものぢやな。」と云つてゐた。

それから三十年餘の月日が流れて、父は昔の朴の木などすっかり忘れてゐたが、今から五年ほど前の或日、舞鶴

司令長官の清河中將から、父あてに、一つの木箱を送つてよこした。

「何ぢやらう。あけてごらん。」

下男に云ひつけて、開けて見ると、中から意外にも美しい實を結んだ朴の枝が出て來た。

「ほう、これは何ぢや。」

訝りながら添手紙を開いてみると、かう書いてある。

「舞鶴で閣下がお住まひになつた官邸には、今も昔の朴の木が茂つてゐて、澤山の實を結んでゐます。閣下が非常に愛玩せられた事をお聞きしたので、一枝二枝お送りします。」

○添手紙

開いて

書いて

住まひ

○愛玩する

瞬いて

みよう

○辛抱
○丹精する

父は清河中將からの手紙を見ながら、さも懐かしさうに目を瞬いて、

「さうぢやよ。あの庭の朴の木ぢやよ。」

しばらくは花瓶にさして眺めてゐたが、

「兼吉。この實を庭に蒔いてみよう。」

と云ひ出した。下男は父の胸中をはかりかねて、

「旦那様、もうだめでせう。芽は出ますまい。」

かう云つたが、父は實を丁寧にもいで、

「いや、出るかも知れん。蒔いてみる。」

自分で庭先の土を掘つて實を蒔き、それから毎日水をかけ、辛抱よく丹精してゐたが、果して翌年の春になる

○愛撫

と、そこから朴の芽が黒い土を破つて頭を出して來た。父の喜びはどんなだつたらう。

「ほ、う。出たよ。芽が出たよ。」

我が子でも育てるやうな愛撫の情で、水をやつたり、蟲をとつたりしてゐたが、二年三年と經つうちに木はぐんぐん成長して、大きな葉をもち、枝さへ青々と延したのである。

よく父は南向きの縁側から、この朴の木の青々と繁つてゐるのを一人でぢつと眺めてゐた。その朴の葉は老いた父の胸に、若かつた舞鶴時代のさまざまを思ひ出を運んだものであらう。朴の實の贈主清河中將は日本海

運んだ

○腹心の部下

○飛んで
○壯烈で

追ふ

海戦の時大尉で、父の參謀をしてゐた、いはゞ腹心の部下だつた。朴の葉かげの靜かな思ひ出は、やがてあの波高い日本海の上に飛んで、壯烈な運命の大海戦が、恐らく父の胸にくりひろげられた事であらう。

父が亡くなつてから間もなく、清河中將は父の後でも追ふかのやうに亡くなられてしまつた。それから二年、二人の魂を宿した朴の木だけは生き／＼としてゐる。今頃は又、青い葉を出し始めたことだらう。庭いぢりの季節になると、父の鋏の音が、どこからか聞えてくるやうな氣がする。

(文藝春秋)

金子薫園

歌人、名は雄太郎、東京の人、明治十年生。

○薄日

貰ひ

懐かしんで

御座い

六 京人形に添へて

金子 薫園

今日はぼうつと薄日が當つて、春がまだ何處かに残つてゐるやうな氣がいたします。

昨夜京都から歸つて來た兄の土産に、私は京人形を二つ貰ひました。兄は、京人形も細工が巧になり過ぎて面白くなくなつて來たと、しきりに昔のものを懐かしんでゐましたが、私はきれいでよいと思ひます。京人形ですから、こんな美しさが似合はしいと申して喜んだので御座います。振り袖の方をあなたに差上げると申しましたら、兄は笑つてゐました。お氣に入る

かどうか知りませんが、京の四條通りの明るい灯の夜、買つて來たさうですから、それをまあどうか氣持よく思つてお納め下さいませ。

兄は四月の初に行つたのですから、丁度一ヶ月あちらに居たのです。嵐山や御室の花の盛りも、散つた後のうらさびしさも、兩方味はつて來たさうです。暮春の嵯峨の路を、晝過ぎから暮れるまで行つたり來たりしたさうで、なつかしく温かい、閑けさの中にひたつて來たことをよろこんでゐました。大原の寂光院をたづねた話も趣深く聞きました。が、いづれお目にかゝつた折にお話し申しませう。お母様によるしく。

○うらさびしさ

○暮春

嵯峨

京都市右京區。

○温かい閑けさの中にひたる

寂光院

京都府愛宕郡大原にある尼寺。平家物語で名高い。

敏子様

五月廿五日

郁子

ゆかしい



京人形
京 いたゆかしく思つてゐま
人 したのを、お兄様がわざわざ
形 ざお土産にお持ち歸りな

悪い
頂いて

いまして、まことにくお見事に拜見いたしました。
お二つしかないお一つを頂いてもいゝんですか。私
なんだか悪いやうな気がしてなりません。この手紙

された中から、お恵み下さ

書いて

でせう

おつとり
雅やか
薄暗い

願傳
ひへ

を書いてをります机の上にお恵みの京人形はのつて
みます。白い頬に瓦斯の灯がさして薄赤んでゐます。
何といふ美しさでせう。巧みといふお話でしたさう
ですが、此の地のかうした人形と比べますと京は京で
す。やつぱりおつとりとした處があります。雅やか
な味がすぐれてゐるやうに思ひます。薄暗い私の居
まはりがお人形で俄にパツと明るくなつたやうな氣
がいたしました。厚くお禮申し上げます。お兄様へ
もよろしくお傳へ願ひます。

五月三十日

敏子

郁子様

荻原井泉水
俳人、名は藤吉、東
京の人、明治十七年
生。

七 新緑の奈良

荻原井泉水

奈良市附近



奈良はいつ來ても好いが、殊に新緑の頃が好い。櫻の
頃に來た時には、まだ黄いろく枯れたまゝであつた芝は、
生き／＼と青んで、鹿がその上に寝ころんだり、又その青
い芽をたべたりしてゐた。
猿澤の池の柳は、萌黄色をした其の若々しい美しさが、
稍老いて、こんもりと葉を茂らしつゝ、水に映つてゐた。
春によく來る團體の客のざわめきも今はなくて、池の縁
にあるベンチには、木蔭を求めて子供を遊ばせてゐる女
がゐるばかりだつた。

○小徑

興福寺
法相宗の大本山、藤
原氏の氏寺として盛
大を極めた。

○興じる
消え。

荒池のほとりはなほ靜かだつた。奈良ホテルに沿う
て、葉櫻のほの暗いほどの小徑を
歩くのも好かつた。池には遠く
の興福寺の塔の影が映つてゐた。
其の水に石を投げて水の輪が出
來るのに興じる子供たちもゐた。
一つの輪が廣がつてそれが消え
てゆくのを待つては、他の子供が
石を投げるのであつた。

梅の木が林をなしてゐる處で
は、園丁が其の枝をおろしてゐた。



猿澤の池

芝の上に落ちた青葉



嗅いで
咲いて

躑躅

輝いて

〇からりとした

動いて

あせび



〇すがれる

には、鹿が寄つて来て香を嗅いでゐた。
鷺の池のほとりには、躑躅が燃えるやうに咲いてゐた。
ボートを浮かべて漕ぎ廻つてゐる人達があつて、水の光
も夏らしかつた。浮見堂に足を休めてゐると、水を渡る
風が快く訪れる。

嫩草山高圓山がそれ〴〵にこんもりとして輝いてゐ
た。高畑のからりとした芝生の上には、大きな花が咲い
たやうに、美しいパラソルが動いてゐた。
あせびの花は大抵すがれてゐたが、其の花の多い谷の
やうになつた路には美しい影が出来て、こまかく洩れて
ひそんでゐる光の戯れも面白かつた。



〔筆峰紫原榊〕

鹿の良奈

春日の社
官幣大社春日神社。

○参詣

○せびる



春日神社

春日の社に近い杉の木立は、夏らしく黒み渡つて、その葉の先から愛らしい浅緑の爪のやうな若葉が出てゐた。参詣の人の多く通る道には、鹿が澤山待受けてゐた。私は煎餅を手に持つてゐるだけ、皆與へてしまつたが、彼等は圓々とした可愛い眼を私に向けて、いつまでもせびるやうに蹤いて來た。一つの鹿は私の前で首を上げたり下げたりした。それは御辭儀なのだつた。私はおとなしく私の前

南大門
東大寺の總門。

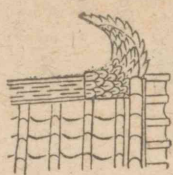
大佛殿
東大寺金堂。

に脚を折つてゐる鹿の背を、犬にでもするやうに撫でてやつた。文字通り鹿子斑の其の肌はつやく／＼しかつた。五月は毛並の光澤の一番美しい時だといふ事である。ぬけ換つてまだ間もない角は、やつとY字形になつたばかりで、赤みを帯びて柔かさうだつた。手に握つてみると、其の赤い色の血のぬくみが感じられた。南大門の通りには燕が澤山飛んでゐた。そこらに佇んでゐる鹿の細く高い脚の間を、すり抜けるかと思ふやうに飛んだり、角細工などの土産物を並べてゐる店の軒に、ついと飛入つたりしてゐた。

大佛殿を左へ、松林の間を行く路の感じも好かつた。

向ふ・向う

戒壇院
東大寺に屬してゐる。
鴨尾



轉害門
天平年間（聖武天皇の御代）の建築といふ。

○簡素
○雄大

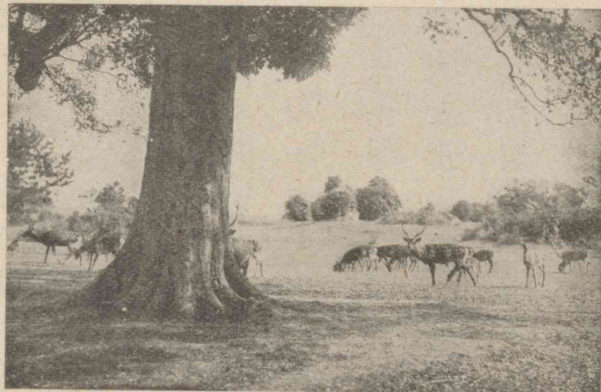


草が長く伸びるまゝになつてゐる向ふに、實に古い堂が見える。それは戒壇院らしかつた。顧みると大佛殿の屋上の鴨尾が金光燦爛として松の間に高く聳えて、松の梢には蟬がじい／＼と鳴きはじめてゐた。

轉害門は、奈良に残つてゐる建築のうちでも最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構は、すばらしいものだと思つた。私は其の門をはひつて大佛殿の裏を歩いた。竹がわつさりと路に垂れてゐたり、柿の若葉が日を照りかへしてゐたりした。古い寺院の土堀が崩れた事によつて、却つて繪畫的に見えるやうな、淋しいひつそりとした道だつた。築地のすそにはきんぼう

茶亭

げが咲き、白い小さい蝶が休んでゐた。



野 日 春

嫩草山の前の茶亭で晝飯をたべた。木の芽の吸物を出した。嫩草山と春日山との間にある谿の道は、若葉の緑が顔にうつるやうな、朗かな感じの處だつた。爪先上りに苦しくないほどの上りになつて、山の奥に踏込んでゆく。洞の楓といふ名のついてゐる通りに、楓がトンネルのやうになつてをり、高い木には藤があちらにもこちらにも咲き垂れ

藤



おぼえる

深 縫 歩
いひひひ
た

てゐた。奈良は藤の花の多い處だが、公園の茶亭のそれなどは大方すがれてしまつてゐるのに、こゝだけはまだふさ／＼とした紫を垂れて美しかった。歩けばさすがに暑さをおぼえる。道に沿うて綺麗な流があり、流に臨んで古風な亭がある。そこに私は腰をおろした。青いかまきりの子が、若い芒の葉先にとまつてふらく／＼としてゐた。奈良の若葉はいゝなと、私は今更のやうに思つた。

私は緑の深い中を縫ひながら、あてもなく歩いた。

(観音巡禮)

北原白秋
詩人、歌人、名は隆
吉、福岡縣の人、明
治十八年生。

良寛禪師
歌僧、越後國出雲崎
の人、性は無欲恬淡
で、和歌に長じ、奇
行で名高い。天保二
年（四九）寂、年七十
五。

八 童 心

北 原 白 秋

聖心は童の心である。

越後の良寛禪師は殊に此の童心の持主であつた。斯ういふお話がある。

一に童男童女、二に手毬、三にお弾き、これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供達と遊ぶ事がまたどんなに嬉しかつたかが思はれて、ほれ／＼する。

その良寛様も子供達には随分馬鹿にされて、盛に愚弄られたり、擲揄はれたりされたらしい。それにも拘らず、

平氣で一所懸命に遊び惚れてゐた良寛様があり難い。

◇

或時例の通り、子供達と隠れんぼをしてゐられた。鬼



良 寛 (筆穂百福平)

になつた良寛様が目を瞑つて、「もういよ。」といふ可愛い聲を一心に待受けてゐられる。

と、丁度日の暮れ時で、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちらちら點き出すと、子供達は急に遊を止めて、こそ／＼と歸

素直

つてしまつた。そこは子供だから、良寛様も何もうつつち
やらかしてある。無論、幾ら待つても「もういゝよ」とい
ふものはない。その内に日が暮れ、長い夜が來た。さう
して、とうとう夜が明けてしまつた。良寛様はそれでも
一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿
した儘、「もういゝよ」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。
その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

◇

それから、また或時のことである。良寛様が今度は隠
れる事になつた。そこで見つけられては大變だといふ
ので、早速田圃の稻叢の中にもぐり込んで、それは可愛ら

おや

しいことだ、それはくゝ小さくなつて、まるで二十日鼠み
たいに頭からすつぽりと稻藁を被つて、おどくゝしてゐ
られた。すると、子供達はまた例の通り一人残らず、こそ
こそと歸つてしまつたのである。それを良寛様は少し
も御存じない。また日が暮れて夜が來て、また夜が明け
た。稻叢には霜が眞白に置き、朝の日が登り始めると、百
姓がやつて來て、何の氣もなく、稻束をやにははづすと、
おやつと驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつてゐら
れる。

「おや、良寛様が。」といふと、慌てて、「そつとしろ、そつと
しろ、子供が見つける。」

いふ

○あどけない

その心のあどけなさ、ありがたさ。まるで純真な子供である。

◇

○沙門

また或日のことである。その良寛様が男の兒や女の兒達とお彈きをしてゐられた。沙門良寛全傳に、「禪師頗る大勝を博して賭物の熬豆いりまめを多く得。」と書いてあるから、餘程の乘氣であつたらしい。丁度其の時、誰かが入つて來た。そして、「おやく、良寛様、なか／＼あなた様はお彈きがお上手で。」と褒めると、罪のないこと、良寛様はほうつと面を赤くすると、まるでおぼこ娘見たいにさもさも恥づかしさうに、そつとその熬豆を膝の下に押隠

○罪がない

恥づかしい

○初々しい

されたといふ。

その心の初々しさ。そのきまりのわるさ、恥づかしさは、全く佛の前に子供らしく、おとなしく、身を遜る心である。尊い聖心は凡べてこの童心を源にする。

◇

○天稟

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔からその儘である。それは何ものにも代へ難い、二つとない尊い天稟である。

○睨む

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日父親から酷く叩かれたのでつい上目をした。そこでまたまた叩かれた。「親を睨むやうな奴は牒になるぞ。」これを

鰈



悄然

いはれた

ふるへて

〇生一本

聞いた良寛様の榮坊は外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中、大心配で、あちらこちらと捜し索めると、ある濱邊の岩の上に悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めてゐた。「榮坊どうした」といふと、榮坊曰く、「おらまだ鰈にならないか。」鰈になるといはれたので、ほんとは鰈になると思つて、一心に海を視詰めてふるへてゐた童心の正直さ。これこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。

(洗心雜話)

二葉亭四迷
小説家、本名は長谷川辰之助、愛知縣の人、明治四十二年歿、年四十六。

〇かぼそい

思 堪
へ〇へ〇

〇大抵

〇たいいけ

九 狗 ころ

二葉亭四迷

ふと目を覺すと、きやん／＼と云ふ聲がする。耳を澄まして聽いて居ると、疑もなく、小狗の啼聲だ。其の聲尻が聽てかぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠い／＼處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼き出して、くん／＼と鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。
私は元來が動物好きで、分けても、犬は大好きだから、近所の犬は大抵知つて居る。けれども、こんなかぼそいたいけな聲で啼くのは、一匹もない筈だから、不思議に思

向いた
○差措く

つて、そつと夜著の中から首を出すと、

「どうしたの、寝られないのかえ。」

と母が寝返りを打つてこちらを向いた。私は此の返答を差措いて、

「あれは白ぢやないね、阿母さん。もつと小さい狗の聲だね。どうしたんだらう。」

「棄狗さ。」

「棄狗つて何。」

「棄狗つて、誰かが棄てて行つたのさ。」

私は暫く考へて、

「誰が棄てて行つたんだらう。」

向いて

「大方何處かの……何處かの人さ。」

「何處かの人を棄てて行つた。」と、私は二三度繰返して見たが分からない。2

「どうして棄てて行つたんだらう。」

母は、「うるさいよ。」とも言はないで、何處までも相手になり、其の意味を説明してくれて、

「もう晚いから黙つてお寝み。」

と優しく言つて、又彼方を向いて了つた。私も亦夜著を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるに連れて、父の躰が耳に附く。寝られぬ儘に、私は夜著の中で、今聞いた母の説明を繰返しく、味はつて見た。先づ何

産んだ

〇餘所

這ひ

吸ひついて

處かの飼犬が縁の下で、兒を産んだとする。小さなむくむくしたのが重り合つて、首を擡げて、みい〜と乳房を探して居る處へ、親犬が餘所から歸つて來て、其の側へどさり〜と横になり、片端から抱へ込んで、べろ〜と舐めると、小さいから舌の先でたわいもなくころ〜と轉がされる。轉がされては大騒して起き返り、又よち〜と這ひ寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く柔らかな乳房を探り當て、慌ててちうと吸ひついて、小さな兩手で揉み立て〜吸ひ出すと、甘い温かな乳汁がどくどくと出て來て、喉へ流れ込み、胸を下つて何とも言へずおいしい。すると、腋の下からまだ乳房に有りつかぬ兄弟

〇慌てる

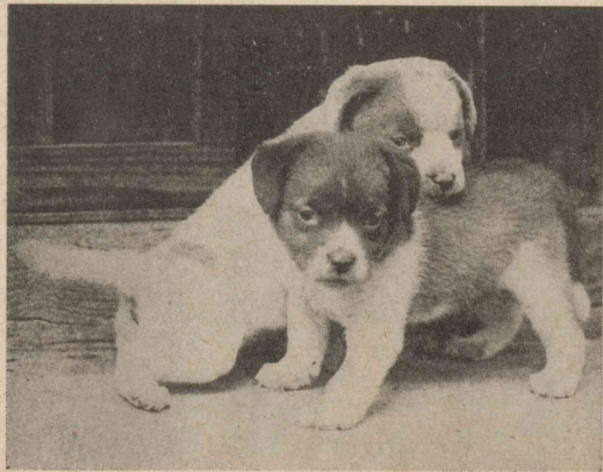
〇正體

生え

が、鼻面で割り込んで來る。取られまいとして産毛の生えた腕を突つ張り、大騒をやつて見るが、到頭取られて了ひ、又そこらを尋ねて他の乳房に吸ひつく。其の中にお腹も一杯になり、親の肌で體も温つて、融けさうない、心持になり、ついうと〜となる。く〜んだ乳房が脱けさうになる。夢心地にも慌てて又吸ひついて、一しきり吸ひ立てるが、すぐに又たわいなくうと〜となつて乳房が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり一向正體がない。
其の時、忽ち暗闇からもちやく〜と毛の生えた節くれだつた腕がぬつと出て、正體なく寢入つて居る所をむず

○窮屈

と引つ摺んで宙に吊す。驚いて目をばつちり明け、いた
 いけな聲で悲鳴を揚げなが
 ら、四足を張つて藻搔く中に、
 頭から何かで包まれたやう
 で眞暗になる。窮屈で息が
 詰りさうだから出ようとす
 るが出られない。暫く藻搔
 いて居る中に不圖足搔あがきが自
 由になる。と襟元を撮まれ
 て、高いく、處からどさりと
 落された。うろくとしてそこらを見廻すけれども、何



ろ こ 犬

○茫然

だか變な淋しい眞暗な處で誰もゐない。茫然として居
 ると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、恐しく寒く
 なる。身慄ひ一つして、くんと親を呼んで見るが、何
 處からも出て來ない。途方に暮れて、よち／＼這出し、雨
 の夜中を只獨り温かな親の乳房を慕つて、悲しげに啼き
 廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行
 つたやうだつたが、それがいつか又戻つて來て、何處をど
 う潜り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。
 「阿母さん、門の中へはひつて來たやうだよ。」と私
 が何だかゝらぬやうな氣になつて、又母に言ひか
 けると、母は氣の無ささうな聲で、

○途方に暮れる

○ゝあたまらぬ

見ようか

○我知らず

○しぶく
雪洞



「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでもいゝよ寒いではないかね。」

「だつて、あら、あんなに啼いて居る。」

と、をりから絶え入るやうに啼き叫ぶ狗の聲に、私は我知らずむつくり起き上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見よう、よう。」

「本當に仕様がなない兒だねえ。」

と、口小言を言ひく、母もしぶく起きて雪洞を點けて起ち上つたから、私も其の後に隨いて、玄關——と云つて

もつゝ次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へ降りて、格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹込んで、雪洞の火がちらくと靡く。其の時、小さな鞠のやうな物がつと軒下を飛び退いたやうだつたが、頓て雪洞の火先が立ち直つて、一道の光がさつと戸外にさし、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照らし出した所を見ると、つい其處に、生後まだ一箇月も経たぬ、むくくと太つた、赤ちやけた狗ころが、小指ほどの尻尾をちぎれさうに振り立てて、此方を見上げて居る。なりは私が寝てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよばたれて泥だらけになり、だ

○なり

○生後

らりと垂れた割合に大きい耳から雫を滴たし、ばつちりと
兩の眼を青貝のやうに列べて光らせて居る。

「おやく、まあ可愛らしい。」

と、母もつい言つて了つた。況んや私は犬好きだ、ちつと
して見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ち
よつちよつと呼んで見た。すると、さほど怖れた様子も
なく、ちよこくと側へ来て、流石に少し平べつたくなり
ながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐいぐい押上げ
るやうにして、べろくと舐め廻し、手をくれるつもりな
のか、頻りに圓い前足を舉げて、ばたくやつてゐたが、果
てはやんはりと痛まぬ程に小指を咬む。

○況んや

○さほど

○流石に

私は可愛くてくたまらない。母の顔を見上げなが
ら、少し鼻聲を出しかけて、

「阿母さん、何かやつて。」

「やるのもいゝけれど、居附いて了ふと仕方がないねえ。」
と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行
つて、缺茶碗に冷飯を盛り、何かの汁を掛けて来てくれた。
早速履脱へ入れて之を當てがふと、小狗は一寸香を嗅
いで、すぐ甘さうに、先づびちやくと舐め出したが、汁が
鼻の孔へはひると見えて、時々くしんくと小さな嚏くしゃみを
する。忽ち汁を舐め盡くして、今度は飯を食ひに掛つた。
他に争ふ兄弟もないのに、頻りに小言を言ひながら、がつ

○居附く

○拒む

争ふ

がつと喫べ出したが、飯はまだ食べ慣れぬかして、とかく上顎に引つ附く。首を振つて見るが、そんな事ではなかなか取れない。果は前足で口の端を引つ搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の隙に、私は母と談判を始めて、今晚一晚泊めてやつと、雪洞はくぼりを持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、「もう斯うなつては仕方がない。阿父さんに叱られるけれども」と言ひながら、つまり、棧さんだ俵はふし法師はふしを捜して来て、履脱の隅に敷いてやつた。それは好かつたが、其の晩啼き通されて、私は些ちとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

（平 九）

敷いて

若山牧水
歌人、名は繁、宮城
縣の人、昭和三年歿、
年四十五。

一〇山

寺

若山牧水

目が覺めて見ると、雨戸の隙間が明るくなつてゐる。もう爺さんも起きた頃だと勝手元の方に耳を澄ましたが、何の物音もせぬ。そのうちに遠く近く鳴く朗かな鳥の聲が耳に入つて來た。何とその種類の多いことだらう。あれかこれかと心あたりの鳥の名を思ひ出してみても、とても敷へきれぬほどさまざま、な音色が枕の上に落ちて來る。私はこらへきれなくなつて飛び起きた。そして雨戸を引きあげた。

照るともなく、曇るともなく、燻り渡つた一面の光であ

〇燻る

敷へ

〇けはひ

〇朧々

〇我を忘れる

る。見上げる杉の木立は、次から次とたゞ静かに押並ん

で、見渡す限り風のけはひもない。それからそれと眼を移してゐた。私は、杉の木立と木立との間に、遙かに光るものを見出した。麓の琵琶湖である。どこからどこまでとその周囲はわからないが、とにかく朧々とその水面の一部が輝いてゐる。



湖琵琶に見るか山叡比

れてぼんやりとそこらを見廻してゐたが、また一つのも餘りに静かな眺なので、我を忘

とだえ〇

〇紛ふ

振向かう〇

のを見出した。ちやうど溪間のやうに、眼前から直ぐ落ちこんで行つてゐる窪地一帯は、僅かの間杉木立がとだえて細長い雑木林になつてゐるが、その藪の中をのそり／＼と半身を屈めながら何か探してゐる人があるのである。頭を圓々と刺つた大男の、紛ふ方なき寺男の聾爺さんである。それを見ると妙に私は嬉しくなつて大聲に呼びかけたが、無論彼は振向かうともしなかつた。



堂中本根山叡比

後で庭に降りて、笥の前で顔を洗つてゐると、爺さんは青々とした生のうどを提げて歸つて來た。「こんなものも出てゐた。」と言ひながら、二三本の筍をも取り出して見せた。

この寺は、比叡の山中に残つてゐる十六七の古寺のうち最も奥にあつて、また最も廢れた寺であつた。住持もあるにはあるが、麓の寺とかけ持で、何か事のある時のほか、めつたに登つて來ず、年中殆どこの寺男の爺さんが一人で留守居をしてゐるのである。四方たゞ杉の林だけで、しかも溪間の行きどまりになつた所にあるために、根本中堂だの、浄土院だの、釋迦堂だの、または四明が嶽、元黒

比叡
比叡山、天台宗の本
山延暦寺がある。

○住持

根本中堂

比叡山草創最初の建
立、延暦寺一山の本
堂。

浄土院

最澄の廟所。

釋迦堂

西塔の本堂。

四明が嶽

比叡山中の最高峯、
海拔八四八米。

元黒谷

法然上人が修學した
青龍寺のある所。

谷などへ往來する參詣人たちも殆ど立寄ることなく、ま
る一週間滞在してゐる間、私はこの金龕の爺さんのほか、
人間の顔といふものを見ることがなくて過してしまつ
た。

多いのはたゞ鳥の聲である。この大正十年が當山開
祖傳教大師の一千一百年忌に當るといふ舊い山である
が、五里四方に亘ると稱へられる廣い森林の到る處が、殆
ど鳥の聲で満たされてゐる。

朝最も早く鳴くのが郭公である。「くわつこう、くわつ
こう」と鳴く。鋭くして澄み、しかも何とも言ひ難い寂
をもつたこの聲が、山から溪へ、冷たく、肌を刺すやうに響



言ひ難い。

郭公

傳教大師
最澄、天台宗の開祖、
近江の人、弘仁十三
年(八三三)寂、年五十
六。

〇鳴りを静める

き渡るのは、大抵午前四時前後である。この鳥の鳴く時、山はまつたく鳴りを静めてゐる。「くわつ」と鋭く高くさうして直ちに「こう」と引くその聲が、二つか三つ或場所で続けさまに起つたかと思ふともうその次は別の頂上か、溪の深みに移つてゐる。暫くも同じ所に留つてゐない。そしてほとんどその姿を人に見せたことがない。

杜鵑



〇急迫する

杜鵑も朝が多い。これは必ずその邊で最も高い梢で鳴く。この鳥も二聲か三聲しか聲をつゞけぬが、どうかすると、取亂して鳴きたてることがある。その時は、例の「本尊かけたか」の律も破れて、まつたく急迫した亂調と

〇息苦しい
感ずる

なつてくる。日のよく照つてゐる朝などは、聴いてゐて

息苦しくなるのを感じる。この鳥は聲よりも、峰から峰、梢から梢へ飛び渡る時の鋭い姿が好い。

それから高調子の聲に混つて何といふ鳥だか、大きさは燕ほどで、その尾が一尺位なのが細々と、實に細々と息を切らずに鳴く。これは下枝から下枝を渡つて歩いて、時には四五羽、その長い愛らしい尾を連



立木杉の山

歩いて

○日が開ける

吸ひ

○間遠に

○釣瓶打に

筒鳥



ねてゐるのを見る。

日が開けて、木深い溪が日の光に煙つたやうに見える時、どこから起つて来るのか、大きな筒からかぎりもなく抜け出して来るやうな聲で鳴きたてる鳥がある。始もなく、終もない、聽いてゐれば次第に魂を吸ひ取られて行くやうな、寄邊ない聲の鳥である。或る時は極めて間遠に、或る時は釣瓶打に烈しく鳴く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれてどうかして一目見たいと、幾度も私は木の雫に濡れながら林深く分け入つたが、遂にその姿を見ることが出来なかつた。筒鳥といふのがこれである。

○寂

○際限

○一齊に

○感
○再々
○覺

筒鳥の聲は、極めて圖抜けた、間の抜けたものであるが、それをやゝ小さく、且人間くさくしたものに呼子鳥といふのがある。初め筒鳥の子鳥が鳴いてゐるのかと思つたが、よく聞けばまったく違つてゐる。山鳩にも似、また梟にも近いがそのいづれとも違つた、やはり呼子鳥としての、言ひ難い寂を帯びた聲である。

數へれば際限がない。晴れた朝など、これ等の鳥が殆ど一齊に、其處此處の溪から峯にかけて鳴きたてる。茫然と佇んで耳を澄ます私は、身體全體の痛み出すやうな感覺に襲はれることが再々あつた。

(牧水全集)

宮城道雄
箏曲家、兵庫縣の人、
明治二十七年生。

二音の世界

宮城道雄

〇轉る

祝うて

見す

毎年正月に、私の家の庭先へ一羽の小鳥が来る。それは去年のも一昨年のもその前の年の同じ小鳥である。だが家の者は誰もそれが毎年同じ小鳥だとは気がつかない。たゞ私だけが知つて居て、その轉る聲を聞いては、「あ、今年も亦正月を祝うてゐるな。」と嬉しく懐かしく聞き入るのである。

眼の見える家人が知らない小鳥を、どうして盲目の私だけが知るだらう。外でもない、私は小鳥を眼で見ず、耳で聞くのだ。毎年、同じ音色と調子とで轉るのを聞いて、

私にはちやんとそれが前年と同じ小鳥といふ事がわかるのである。

私達盲人は、たゞ音の世界にばかり生きてゐる。これは外の人からは、全く不自由な世界のやうに思はれるかも知れない。併し、決して不自由でも、淋しい世界でもない。

私は都の真中にゐて、海の潮鳴りを聞く。といつたら、人は怪しむかも知れぬが、天候が悪くなつて、嵐の兆が見え出した日などに、ちつと坐つて耳を傾けて居ると、都會の騒音が正しく海の潮鳴りに聞えて来るのだ。遙か彼方から轟いて来るこの潮鳴りに耳を傾けながら、私は身

〇兆

〇正しく

轟いて

防空演習
昭和八年八月、東京
市で行はれた防空演
習。

行はれる

○國民皆兵
○一朝

○安閑

答へ

體を都の真中に置きながらも、魂は遠く海邊に遊ぶことが出来る。盲人の世界も亦楽しいかな。

さて、先日、甚だ愉快な話があつた。それは例の防空演習が行はれた頃の事だ。

或日、私は盲學校の生徒達と話をして居た。すると、一人の生徒がこんな事を言ひ出した。

「日本は國民皆兵の國だから、一朝國家に事ある場合は、盲人と雖も安閑としては居られぬ。だが、銃を執つて、覗ひ撃つわけにも行かぬ。どうすればいいだらう。」

「我々は眼こそ見えぬが、耳がちゃんと聞える。萬一の

○無邪氣

○壊滅

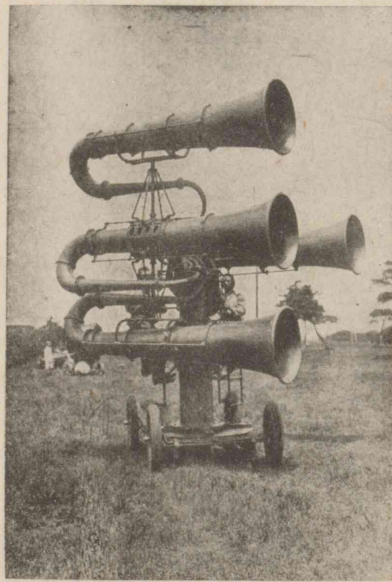
しまふ。

ひいて

場合には、皆で最前線に出て、敵機の爆音を聴きつけようではないか。」
勇ましい、そして無邪氣な、しかし眞剣な話を聞いて、私はわれ知らず微笑みながら、

「だが、そんな場合に、不幸にして帝都が壊滅したとすると、盲人は逃げ遅れてしまふ。

そんな場合だから、盲人の手をひいてくれる人もあるまい。それでもいいか。」



機音聴

かまはぬ

○本望

○いさゝか
○得意

○やにはに

といふと、彼等は口々に、

「無論かまはぬ。」

「それこそ本望だ。」

と答へた。

盲人にもこれ程の愛國心がある！といさゝか得意になつた私は、數日後、この話を知人の將校に話した。定めし褒めて貰へると思つて熱心に話したのだが、それを聞いた軍人は、やにはに怒聲をあげて、私を叱りつけた。

「馬鹿を言つてはいけない！我々軍人があなた方盲人を残して、只の一人でも逃げると思つてゐるのか！」叱られながら、私はもう一度嬉しくなつた。 (騒音)

小野賢一郎

日本放送協會文藝部長、俳人、燕子と號す、福岡縣の人、明治二十一年生。

奥村五百子

愛國婦人會の創設者、肥前の人、明治四十年(一八九七)歿、年六十三。

○生別する

○心を碎く

○荒膽をとりひしぐ

會は。う。

○白刃の下をくゞる

三 奥村五百子

小野賢一郎

奥村五百子女史は肥前唐津高德寺の住職了寛の娘と生まれた。明治維新の亂れには、勤王のために男装して父の使を果したこともあつた。夫と縁うすく、第一の夫とは死別し、第二の夫とは生別して、それからは、専ら國事に心を碎いた。

女史の負けじ魂はしば／＼男の荒膽をとりひしいだ。名士に會はうとして、もし先方が避ける時は握飯を携へて幾日も玄關に詰め切る位の事を、平氣でやつた。白刃の下をくゞつたことすらも屢あつたが、その一面には極

○孝子節婦

舞ふ

光州

全羅南道光州郡にある町。市街の西南にある公園内の光州神社境内に奥村五百子の銅像がある。

○開拓
京城
朝鮮の主都。

めて涙もろい處があつた。そしてその涙は君のために泣き、國のために泣く涙であつた。軍人のために、遺族のために、孝子節婦のために、泣く涙であつた。かういふ女史にはまた、針を持ち、庖刀を持ち、三味線を弾き、舞を舞ふ優しい半面もあつた。

明治三十一年の春には、朝鮮に渡つて、光州に實業學校を創立した。同時に、そこに日本村を建設しようとして、養蠶の教師や、大工、左官、洗濯屋までを移住させて、朝鮮の開拓に従事した。その時分のことである、京城の日本公使館へ行つて、玄關に入るや否や、「何といふさまです。月給はうんと取りながら、破れた國旗を揚げて居るとは、

○叱咤する

○事苟くも

○異名

○暴徒
○ひるむ

○拜謁

早く國旗をお取替なさい。」と叱咤したのは、そして風のためにはぼろ／＼になつてゐた日の丸が、間もなく新しい旗になつたのは。

萬事がこの調子で、事苟くも國家に關して來ると、女史は誰れ彼れの差別なく、眞劍に眞向にぶつかつた。「雷婆さん」の異名はやがて全國に轟きわたつた。「御國のためには死ねば阿彌陀様が引取つて下さる。」と口癖のやうに言つて、何物をも恐れなかつた。光州の實業學校は度度暴徒に襲はれたが、少しもひるまなかつた。

翌年七月、女史は東伏見宮妃周子殿下に拜謁を仰せ付けられた。女性の身を以て、國家のために、海外で産業を

〇めでる

〇言上する

興し、宗教をひろめてゐる健氣な心掛をめでさせられたのである。その時女史は、前後三時間に亘り誠心をこめて朝鮮の事情を言上した。そして、

ますらをも及ばざりけり國のため

こゝろつくしし君がまことは

〇拜受する

といふ御親筆の色紙を拜受し、「死んでも心のこりはありません。」と言つて感激した。

明治三十三年には、北清事變の慰問使として東本願寺から支那へ派遣された一行に加つて天津へ赴いた。宿は日本領事館であつたが、一夜領事夫人鄭はま子から團匪襲撃當時の話を聞いて、女史の心に始めて一穗の灯ひかりが

天津

河北省。北支那の商業都市。

鄭はま子
領事鄭永昌の夫人。

〇一穗の灯

點とまつた。話の大要は、かうであつた。

領事館の婦人たちは義和團匪に包圍されると同時に、



奥村五百子

日本婦人らしく短刀を肌身離さず持つてゐて、萬一にそなへた。砲煙彈雨の中をくぐつて炊事や負傷者の手當に狂奔したはま子夫人は、大砲の音を聞きながら産婦の

〇萬一に備へる

〇砲煙彈雨

〇狂奔する

とりあげをもした。領事館が爆破された時、夫人は兩陛下の御眞影を移すために二階へ上つたが、やうやく奉安した刹那に、大地の裂けるやうな音がした。「その時はも

う死んだな！と思ひましたが、目をあけると、人の顔が見えるではありませんか。」と聞かされると、女史は泣き出しました。

天津や北京で、日本の兵士が、豚の死骸が浮いてゐる濁流の水で、炊事をしたり、洗濯をしたりしてゐるのを見て、「軍人は、國家のためとはいへ、實に一方ならぬ苦勞をしてゐる。せめて、戦死者の遺族や、出征者の留守宅の人達を慰めてでもあげなければ、天子様や如來様にすまない。」かう考へると、一たび點された女史の心の灯はだん／＼とその光を増して來た。百數十萬人の女性が團結してゐる今日の愛國婦人會は、實にこの旅行中に女史の心に

北京^{ペキン}
今の北平で明、清兩朝五百年間の首都であつた。
浮いて

○心の聖火

點された聖火が種となつて燃えさかつた結果である。その後である、女史が半襟一掛演説の行脚を始めたのは。

○節約する

「半襟一掛を節約して下さい。その結果が戦死者の遺族や出征者の留守宅の人々を慰めて上げる大きな働をするのです。」東京の集會の席上や街頭でまづ擧げられたその叫は、次第に全國にひろがつた。被布に袴、草鞋穿きの女史は津々浦々にその姿を現した。どこへ行くにも宿料は一泊五十錢、汽車は三等と定め、會の金と自分の金とを嚴重に區別して、何事にも公私を混同することがなかつた。若しも女史の主張に對して心なき批評や嘲

○街頭

○津々浦々

○公私を混同する

○嘲笑

○徹底的に論議する

笑を加へたりする者があれば、徹底的に論議して譲らなかつた。「雷婆さん」は全國到るところ、雷を鳴らしながら、その君國を思ふ誠意に人を泣かしめた。

○熱辯

石川縣の或所で講演をした時のことである。女史の熱辯に動かされて入會の申込をした者も相當にあつたが、人々の立ち去つたあとに、洗ひ晒しの木綿の筒袖を着た三十歳ばかりの婦人が唯一人残つてゐた。そして女史が奥へ入らうとすると、「先生」と呼び止めて、「私は車夫の女房でございます。私のやうな卑しい者でもその會へ入れて戴けませうか。私は軍人さんがそれほどまでお國のために難儀してゐられるとは知りませんで

ございます

入らう

○感激する

した。こゝに私が内職に草鞋を作つて賣りためた金が一圓あります。これでどうぞ入會させて下さい。」といふのであつた。その女は目いっぱい涙をためてゐた。これを聞いた女史も感激して泣いた。

有難う

女史はその翌日、朝早く車夫の妻の家を訪ねた。そして「昨日は有難うございました。私は、あなたにお禮を

〇いたはる

言はねばどうしてもすまない氣がするので、忙しい中を繰合はせてお訪ねしました。これは東京を出る時、さる

〇賜はりもの

高貴の御方が私の老體をいたはつて下さつた賜はり物ですが、これをあなたに差上げます。どうぞこれを著てお國のために働いて、立派な日本婦人になつて下さい。」

強ひて

○逸話

○慰問する

○考案する

ヘルメット



と言つて、眞綿のはひつた一枚の肌着を贈つた。向ふが驚いて辭退すると、「高貴の御方が私へ下さつたのも、考へやうでは、あなたのやうな心の美しい方に下さつたわけなので、私はそれをお取次するのです。どうか遠慮せずを受けて下さい。」と言つて、強ひて取らせた。

かういふ逸話は到るところに残された。日露戦争の時に愛國婦人會は七十萬人の會員を有する大團體となつて國家的な働をした。また女史は出征軍人を慰問するため、自分で考案したカーキー色の筒袖に袴を穿ち、カーキー色のヘルメット帽を被つて滿洲へも赴いた。

明治三十九年の秋、女史は愛國婦人會の立派な發達に

○退隱する

總裁宮殿下
閔院宮載仁親王妃智
恵子殿下。

○一くさり

○心境

○創立する

安心して退隱した。その時九段の偕行社で、總裁宮殿下御台臨の下に、盛大な送別會が擧げられたが、女史は一生の思出にと、謠曲船辨慶の一くさを謠ひつゝ、日の丸の扇を開いてしづくゝと舞ひをさめた。その中には、「功成り名遂げて身退くは天の道と心得て」といふ陶朱公の心境をあらはした一節があつた。

婦人團體の母奥村五百子女史は、かうして全國民に惜しまれつゝ、自ら創立し發達させた愛國婦人會を退いた。そして一層惜しまれ歎かれつゝ、翌四十年の二月五日を以て京都帝國大學附屬病院の一室に逝いた。

渡邊霞亭
小説家、名は勝、別
號は碧瑠璃園、愛知
縣の人、大正十五年
歿、年六十三。
内海
瀬戸内海。

三日の岬 渡邊霞亭

私は裏日本の風景が好きです、人間が好きです、温泉が
好きです、食物が好きです。表の方では、内海の景色と、鯛
網で捕れる鯛とが好きですが、裏の方では凡べてが好き
です。殊に山陰の風景は、出嫌ひな私に綱を付けて引つ
張つてくれます。大した用事もないのに、三度までもあ
のどす黒い煤煙だらけの汽車に乗込んで、日の岬の果ま
で行つたのは、其處によくく、の憧を持つからです。私
は世の中に何が一番嫌ひなといつて、長いトンネルを汽
車で通るほど嫌ひなことはありません。ひどい時には、



煤煙
日の岬附近

嫌ひ。

○魔の手

大きな魔の手で胸を抑へつけられるやうな苦しみも感
じます。そのトンネルが山陰本線には非常に多くて、殆
どトンネルばかりの間を驅けて居るやうな處がありま
すが、それ程のトンネルも、この道中では餘り苦痛には感
じられません。「おや、またお出でなさつたな。」ぐらゐで、
平氣で通り過ぎます。そして、トンネルを出た處には、必
ず明媚な風景があります。古い譬ではありますが、その
道中は全く苦のあとには樂のある浮世の状態を見せて居
るやうで、一種の感興を催さずには居られません。
その樂がちよつとの間で、又、苦の世界へと進み入りま
す。その入り方が餘り早いので、頭痛を感じない譯には

○明媚

○浮世

○感興を催す

参りませんけれども、其處は自分のずつと昔の先祖の故郷であると思ふと、自然に懐かしさが浮かんで來ます。乗つて居る汽車の沿道の山にも原にも、先祖の足跡がついて居るかと思ふと、一々お辭儀がしたくなります。私は子供の時から大國主命が好きです。「大黒様といふ方は、一に俵を踏んまへて、二につこり笑つて。」と謠はせられた時から大好きです。それは俵を踏んまへてお立ちになつた御様

大國主命
素戔嗚尊の御子、出雲大社の祭神。



岬の口

福々しい

〇經營する

受けさうな



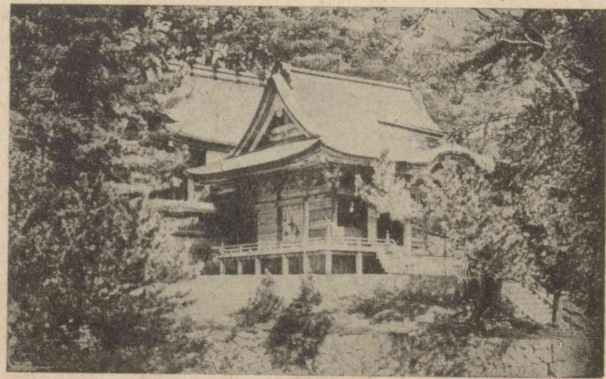
大黒様 (谷口香幡筆)

子が福々しいからではありません。また振上げられた木槌の中から、無數の寶が出るからでもあります。私は自ら大國主命の御家來であると信じて居るからです。少くとも私のずつとく、昔の先祖は、大國主命のお靴をさげて、大國主命が裏日本を御經營なさつた時のお供をしたであらうと思つて居るからです。それなら、私が今少し福の神のお蔭を受けさうなものだといふ人があるかも知れませんが、私はどんなに貧乏でも、私の三千年前

傳はつた

の先祖は大國主命の御家來であつたといふ事を、たとひ先祖から傳はつた鏃一つないにしても、私の魂はちやんと承知して居ります。だからこそ、出嫌ひな私が三度までも山陰に出掛けて、土の香を嗅いだではありませんか。先祖が忠義も盡くし、遊びもしたらうと思はれる處々の昔からの面影に憧れて、そこらを駆け歩いたではありませんか。

その中で、一番私の心をそゝつた處は日の岬です。日



日御碕神社

〇心をそゝる

伊那佐の濱
島根縣大社町の海濱の舊名。

〇危険

〇逗留する

少彦名命
神産巢日神の御子、大國主命を助けて國土を經營された。

武御雷神

茨城縣鹿島神宮の祭神、經津主神とともに天照大神の命を受け出雲に使用して、大國主命から國土を受取られた神。

經津主神

千葉縣香取神宮の祭神。

〇交渉

〇慰勞

の岬へは伊那佐の濱から小舟に乗つて行くのです。海上三里ばかりありませんか。少しでも風が吹くと危険なので、舟が出ませんから、運の悪い人は二日も三日も逗留して、日和になるのを待たねばなりません。「これで三遍来るが、一遍だつて舟の出た事はない」と、泣顔をして歸る人もあります。伊那佐の濱は、少彦名命が始めて潮に乗つて出て來られた處、武御雷神と經津主神とが大國主命に國讓の交渉をされた處で、大國主命には最も關係の深い土地、また日本國民に取つては忘れる事の出來ぬ靈跡です。私の先祖も、大國主命が國を平げて、始めてこの濱へお出でになつて、御慰勞の酒宴をお開きなされた時、

〇もだす

〇風 快ぐ

〇やるせない

〇渺茫 見え隠れ 送り迎へ

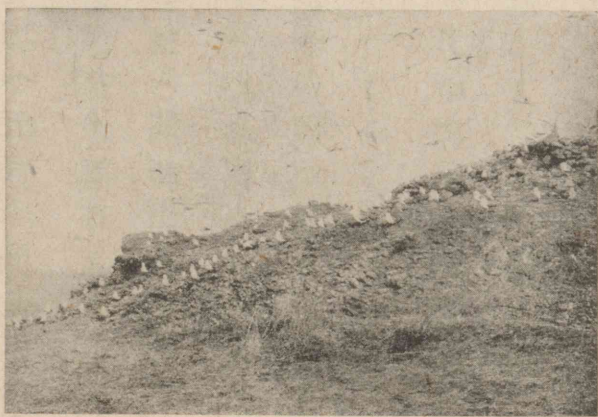
〇微塵

定めて大いに杯を上げたことでせう。主命もだし難く首に掛けた出雲石や勾玉まがたまをかちくといはせて、つまらぬ舞などをお目にかけもしたでせうが、この二神との國讓の交渉には、どんなに心配した事でせう。私はこの濱に立つて、朝日に風ぎ渡る海の景色に接した時ほど、爽快な懐かしい、そして、やるせない思をした事はありません。伊那佐の濱から日の岬へ行く間には、一つく古い歴史と傳説とを持つ多くの岩が、渺茫たる波濤の間に見え隠れして、私達を送り迎へしてくれます。中にも、武御雷神が、「ぐづく言ふと、この通り微塵にするぞ。」と威して、海中へ投げられたといふ千引の岩もあります。甲よろひのを

鼻高山 出雲大社の東北にある出雲山の別名、日御碕神社、御碕神社ともいふ、國幣小社、素戔鳴尊を祀る。

どしを見るやうに、段々刻みになつた甲岩もあります。潮の色も、藻の薫も、三千年前の姿をそのまゝに持つて居るかと思ふと、自然に起る感激の涙が舷にかゝります。

鼻高山はなたかやまを右手に見て、岩礁の間から舟路が變ると、其處に日の岬の船著場が見えます。一面の老松、その上に無数の白い鷗が舞遊び、日御碕神社の棟木が松の葉隠れに見えます。それを見ると、故郷へ歸つた



日の岬の鷗

○胸を衝いて出る

○炊烟

○園 ぶ。〇

時のやうな歡喜が胸を衝いて出ます。向かつて右手は茂つたまゝの竹垣で、それが右の方へ五六十間も延びて居つて風や波を防ぐのに役立つて居ります。それに四角な切穴が處々にあつて、其處から人間が出入するので、垣の中には、少くとも二三十戸の人家があるらしく、枯れて白くなつた笹葉の間から家の棟が見えて居ります。白い炊烟が昇つて居ります。

私は舟が岬に著いた時、太古のすがたをそのまゝ見せて居るのは此處だと思ひました。ずつと以前の祖先の住んでゐた家は、この竹垣——ではない、枯れた藪垣で圍はれた、かうした家であつたらうと思ひました。

山川 建

男爵、文部省専門學務局長、東京の人、明治二十五年生。

○再興する

稱へて

行はれた

一四 オリンピック

山川 建

現在の國際オリンピック大會は、その昔古代ギリシャで行はれたオリンピック祭を、一八九四年に佛蘭西の教育家クーヘルタン男爵が再興したものであるから、これを現代^{モダン}オリンピックと云ひ、古代^{エシエン}のを古代^{エシエン}オリンピックと稱へてゐる。古代オリンピックは、ギリシャの主神デウスの神靈を慰める爲に、毎四年に一回神前の庭でオリンピック祭を催し、専ら競走・五種競技・拳闘・レスリング等の如きスポーツを行つたのであるが、尙その外に音楽・美術・辯論などの競争も行はれた。この大祭は大抵夏季に

○禁止する
○絶對の

○餘念

絶え

謂はれて

○神慮

行はれたもので、祭典の行はれる一箇月の間は、ギリシヤ全土に亙つて、一切の争鬪を禁止して、絶對の平和が保たれるやうになつてゐたのである。當時のギリシヤは小國分立し、互に國力擴張に餘念なく、常に小競合や戦争が絶えなかつた。そこで四年に一回は一定の期間だけでも鬪争を止め、平和の氣分を得たいといふことから、オリンピック大祭が行はれたとも謂はれてゐる。

ともかく、オリンピック大祭にはギリシヤ全土から各國それ／＼代表的の選手を出して、盛に競技を行ひ、その期間は全ギリシヤに平和の氣分が漲つてゐた。この時若し争鬪を敢へてするものがあれば、神慮に逆らふもの

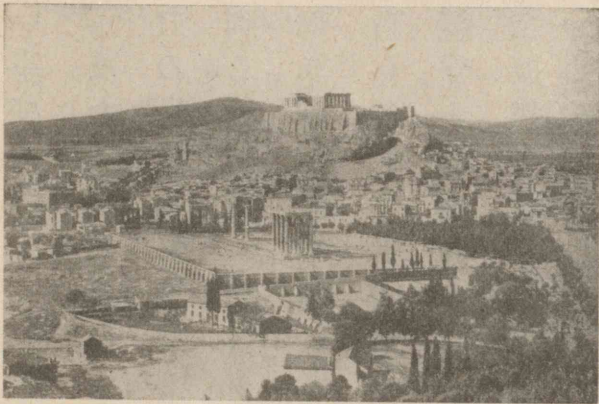
○制裁

○絶對に

○妙味

○達人

○人品
○格性



墟廢のアピソリオ

として、嚴しい制裁をうけたことは、事實である。スポーツによる争は行はれたが、國家間若しくは個人間の争議は絶對に禁止されたといふのは一種の心理的妙味を含んでゐる。また競技に對する態度は極めて眞面目で、選手に選ばれる者は、競技の達人であると同時に、品性や人格も立派でなければならず、また體格も强健壯美であつて、謂はば總べての點に於いて代表的青年であつた。

行ひ方

○科學的

○殺伐

○卑怯

○振舞
○正々堂々

競ふ

フェアプレー
公平正當な勝負。

そしてその選定權は官吏に屬してゐたといふのも面白い事である。

また競技の行ひ方は頗る眞剣で、體力の盡きるまで、氣力の果てるまで、熱心に争つたもので、拳闘などでは、死に到るまで戦つた者もあつた。何しろ今日の如く競技のやり方が科學的に考へられたものでもなく、また人情は自ら殺伐であつたから、行く所まで行くやうなはげしい競争が行はれたのである。しかし當時に於いても卑怯な振舞や陋劣な手段は堅く戒められ、謂はゆる正々堂々の陣を布いて、全力を傾けて相競ふといふ、フェアプレーの精神は十分に發揮されてゐたのである。

○絶大

○表彰する

オリーブの冠



○物質的
輝いて

○純眞

○道場

かくの如くであるから、競技に優勝した者は、絶大の名譽を負ふは謂ふまでもなく、その名聲はギリシャ全土に響きわたるのである。しかしこれを表彰する方法は極めて精神的で、神前に植ゑてあるオリーブの葉で作つた冠が授けられるに過ぎなかつた。決して物質的の褒賞を授けることはない。こゝにも今日のアマチュアスポーツの精神が輝いてゐたのである。かく古代オリンピックは、神にさゝげる神聖な祭典としてギリシャ民族の平和的施設として、また純眞なスポーツ精神の發揚として、將又堅實な心身鍛錬の道場として、誠に意義深きものであつたことはいふまでもない。

○功利的

しよう

○職業化

○腐敗する
○地に墮ちる

○暗示

しかしその後ローマ時代に入ると、ローマ人の功利的の氣分からスポーツを何とか社會上に利益的に役立つものにしようと考へ、遂に見せ物にしてこれを觀て楽しむといふ風になり、随つてスポーツの職業化・興行化が盛に行はれ、外觀的に盛大を極めたが、眞のスポーツ精神は腐敗し、純眞な青年の心身鍛錬の美風は地に墮ちてしまつた。その結果はいふまでもなくスポーツの廢滅を導き、またオリンピックゲームスも中止の止むなきに至つたのである。この消息は吾々に一つの大きな暗示を與へる。それは、即ちスポーツの發達は、決してローマの職業化にまで導いてはならぬといふこと、どこまでもギリ

アマチュアスポーツ
非職業的運動。

○弊風
○醸す

○再興する

○標準する

スポーツマンシップ
運動精神、競技道徳。

シヤの純眞なアマチュアスポーツの限度を超えてはならぬといふことである。何事にも氣の早い日本人はアマチュアスポーツが完全に建設されないうちに、はや既にスポーツ職業化の弊風を醸しつゝあるのである。大いに戒むべき事と思ふ。

現代のオリンピックは、前にも述べたやうに、一八九四年に再興されたのであるが、その精神はギリシヤ時代のオリンピック精神に準じたことは謂ふまでもない。また毎四年に一回行はれることも同様である。即ちアマチュアスポーツの確立とフェアプレーに依る競技の普及と、そして純眞なスポーツマンシップを通しての國際

○大眼目
オリンピックの
マーク



○表象する
○明朗快活
○純真無垢

親善とが大眼目となつてゐるのである。現にオリンピックのマークとされてゐる五つの輪の連鎖は、よくこの精神を表象してゐるのであつて、五つの輪は世界の五大洲を象り、五大洲に在る各國民が仲よく手を聯ねて行くべきことを示してゐる。また五つの輪にはいろ／＼色がついてゐて、亞細亞は黄色、亞米利加は青、歐羅巴は緑、オーストラリアは紅、アフリカは黒といふ意味だと謂はれてゐる。而も一つ／＼の圓輪は、明朗快活、純真無垢にしてスポーツの精神に相通ずるところがあるのである。

(學士會月報)

一五二の一躍

人見絹枝

人見絹枝
女子陸上競技選手、
大阪毎日新聞記者、
岡山縣の人、昭和六
年歿、年二十五。

用ひて(る)

居られようか

ガ
ン
英國の女子跳躍選手。

○脂が乗る

マネージャー
監督、支配人。

○進境

第四回、それは全く私を不安のどん底に沈ませた。今度こそはと思つて、ありたけの力全部を用ひて行つたその一躍！ 悲しまずに居られようか。やはり私の踏切脚は合はない。記録は五米一八、ガン選手はこれに比して益、脂が乗つて来て、其のレコードを五米四四まで引上げた。英國のマネージャーの喜び、同國選手の喜び、私はうらやましく之をながめた。チェックスロバキヤのモローバー選手も亦五米二八の進境を見せて迫つて来た。私の心は一層暗くなつて行く。この時まで落著い

いらだつ

てみた私の心は、急にいらだつて来た。何といふ情ない事だらう。

あとに残つた第五回目。今度こそ跳ばねば、又今日もあのスタンドの優勝マストに英國の國旗を繾されるのだ。第六回目もあるが、それには殆ど力が盡きて十分に脂が乗らないのが常例だ。

この五回目。私は案ぜずにはゐられなかつた。更に二回の歩測をやり直した後、私はその當日、私の持つすべの力を集中して一躍を試みたのであつた。併しその五回目の成績は甚だ悲惨な結果を來した。みじめとか、慘酷とか、言うても言ひたらぬものであつた。

スタンド
鐘壇式に作られた競
技の觀覽席。
マスト
帆柱、柱。

○悲 慘
○み じめ
○慘 酷
言うても

引上げよう

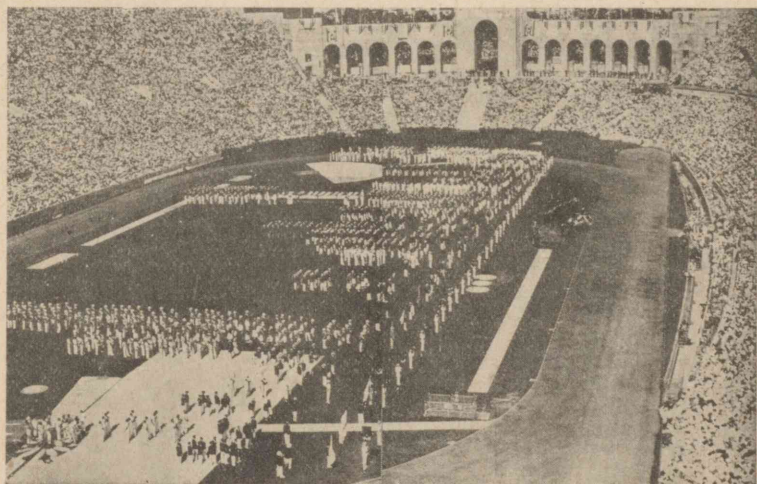
引裂いて

踏切脚は更に合はない。しかもその時には左脚が踏切板に纔かに懸つたばかりであつた。身體に十分ばねのつかぬ上に、私は心にあせりを覺えた爲、空中で行ふべき挟み跳に無理が出来て、平常の通り著陸前、脚を前方に延ばすと同時に、兩手を上方に引上げようとしたその時、やすりのかかつた鋭い靴のスパイクで、自分の右手の掌を六箇所も深く引裂いてしまつた。

記録は五米三一。私は何といふ立場に置かれたのであらうか。審判員の持つ卷尺のメートルの度盛をちつと見つめた時、私には殆ど希望も力も無くなつた。脱ぎすてたオーバースニーカーを著た下に、傷ついた

おどよめき

〇一大變事



場技競クッピンリオ

手を隠しながら、黒田マナー
ジャーの傍に戻つて來た。
瑞典のプラチーノ選手は、
見事五米一六のレコードを
示す。併し七萬近い觀衆は、
一寸拍手を送つた許りで、又
直ぐ元の静けさに歸つてし
まつた。何のどよめきも無
く、場内の空氣はいやな程落
著いてゐる。今に一大變事
でも起るかの感を持たせる。

ファイナル
最終、決勝戦。

槍投もファイナルに進んでゐる。鐵彈投のファイナ
ルはもはや終つたらしい。觀衆七萬の人達は、槍投の結
果にも鐵彈投の勝負にも目もくれず、たゞあと一回残さ
れたガン選手と私との決戦を待つてゐる。英國勝つか。
又日本のこの私が勝を取るか。鳴りを鎮めてその結果
を待つてゐるのであつた。

ガン嬢の面には軽い喜びの色が浮かんで見える。

「人見さん。しつかりやれ。あともう一回あるからな。」
といつて下さる黒田マナージャーの顔。それはもう常
人とは思はれぬ程青くなつて、その唇はしきりに痙攣し
てゐる。私の心は此の時どうであつたらう。あとに残

閉ぢる

○さもなければ

ゴッド・セイブ・ゼー
キング
英國の國歌。

叶へて貰ふ。

○繰言

救ふ。

○故國

つたのは本當に一回きり。この一躍で、私は今日の試合を閉ぢねばならぬのだ。どの様なことがあつても、この一躍に成功しなければならぬ。さもなければ、みすみす英國の國旗が、又今日もあの最高の旗竿の上につるされて、ゴッド・セイブ・ゼー・キングの歌を聞かされるのだ。

昨日から見飽きる迄、英佛國旗は揚つてゐる。どうか今日たつた一度、一度だけでよい、それだけ叶へて貰ふことは出来ないであらうかと、繰言をする外はなかつた。

若し自分を救ふ神様があるならば、私の右脚についてこの一躍を助けて下さい。あゝ、今日こそ日章旗を揚げたいものだ……。若しこの不成績を故國にゐる父母等

届いて

が見たならば、どんなに悲しむであらう。此の間も郷里の方からの手紙に、「お前が家を出てからといふものは、母と姉はお前の勝利を一日に二度、氏神様に詣つて祈つてゐる。國の爲だからしつかりやつてくれ。」といふ意味のものが、二通迄も届いてゐるのである。

「走巾できつと勝て！」といつて下さつた方々にも、世間の人達にも、どの様に言つて詫びられよう。御詫だけでは濟まない。あゝ、この最後だけを……。

私のこの苦しい氣持を七萬の觀衆や、百六十名近い各國の選手へは勿論、唯一人の黒田マネージャーにさへも話すことが出来ず、一人で苦しんで居つた。その瞬間、泣

○瞬間

見よう

〇覺悟

スタート
出發點。

〇征途
門出

〇けたまわしい
動き出さう

木下博士
名は東作、醫學博士、
當時日本女子スポー
ツ聯盟會會長。

くにも泣かれなかつたのであつた。

あゝ最後だ。跳べるだけ跳んで見よう。

覺悟はして立つたが、併し私には自信も希望も凡べて絶たれてしまつたあとであつた。かうして最後に助走路のスタートに立つた時、私は急に思ひ出した。

七月八日午後八時、下關行の特別急行で、この征途の門出にのぼつたあの時、大阪驛で漸く暮れたばかりのホームのベルのけたまわしい音を後にして、汽車が動き出さうとした時、木下博士が一人見さん、もうそんな寂しい顔はよしてくれ。先生だつて一人で年若い娘を旅立たせるには心配だ。併し貴女も二十歳だ。この大任を果し

〇餞別



こ の 一 躍

人の日本人である黒田氏にも話すことが出来ず、外に誰

て歸る日がきつとある事と思ふ。僕は貴女に何か餞別

をやりたいが、何も別にこれと
いつて與へるものはない。唯
この作つて上げたユニホーム
とパンツ、是は先生だと思つて
向ふに行つて身につけて競技
場で奮闘してくれ。貴女の苦
しむ時はきつと先生も案じて
あると思へ。それから今一つ
ある。それは向ふに行けば、一

○慈父

耐へて
拭いて

にも知らせられぬ泣くに泣かれぬ時もあるだらう。併し、その時は貴女は目を閉ぢて、日本の神様を拜め。きつと貴女は救はれる。なあ！ きつとさうするのだよ。元氣で行つて来い。」かういつてくださった慈父にも勝るその御心を思ひ浮かべて、私は靜かに目を閉ぢて、「どうか一度です。跳ばして下さい。」と夢中に祈つた時、今迄耐へて居つた涙が急に兩頬を傳はるのであつた。拭いても拭いても涙は絶えない。側にあるガン選手に對して恥づかしいほど涙が出る。

助走の三十米餘の地面がぼんやりかすむ。

夢中で走り出したその最後の一躍。今迄合はなかつた

○一分一厘の違ひ

フアウル
競技上の規則違反。

アナウンサー
ラヂオの放送者、競技場等の放送者。

その脚も、八寸の踏切板に一分一厘の違ひなく、右足が強くあつた。占めた！ 跳べた。始めて跳べた。記録五米五〇。私は直ぐに大聲を出して喜びたかつた。併しよく考へれば、私の後にはまだガン嬢の一躍がある。

ガン嬢を見たとき、同嬢はしきりに深呼吸をしてゐる。そして終に走り出したその時、私はその助走の有様も何も見ない。たゞ八寸の踏切板を見つめた。今も私の眼に明かに残るそのガン選手の左脚。踏切板の前五分ばかりフアウルになつた。

あゝ、……初めてガン選手に打勝つことが出来たのだ。アナウンサーの聲もほがらかに決勝の報告がされた。

〇一齊に

ハロー
人の注意をひき、又
勵ます叫聲。

〇掲揚する

フィールド
陸上競技で跳躍・投
擲等をする所。(トラ
ックの對)

違ひ〇

〇赤子

その聲の終るか終らぬ中に、今迄静まり返つてゐたスタ
ンドの觀衆は、一齊に總立ちになつて、そのスタンドを靴
でたたく音、破れる様な拍手、暫くは止まなかつた。「ハロ
ー、人見、人見」の聲を浴びせられながら、高々と日章旗は
スタンドの中空高く、「君が代」の吹奏裡に掲揚された。
これを見た黒田マネージャーと私とは、今迄の苦しみ
も急に嬉しさに變り、フィールドの中で泣けるだけ泣い
た。多くの白人の中にたつた二人の日本人が、日章旗の
下で泣いたその涙は、ほんとに美しいものに違ひなかつ
た。この時こそ始めて自分は日本の天皇陛下の赤子の
一人に成り得たものと思つた。

(スパイクの跡)

藤原 咲平
理學博士、中央氣象
臺技師兼東京帝國大
學教授、長野縣の人
明治十八年生。

〇風光明媚

〇文士

〇悲觀
〇天惠

〇根
據

一六 天惠と日本

藤原 咲平

日本の氣候が好いか悪いかいふ人に二通りある。
一つの側では口を極めて日本をほめる。風光明媚であ
る、世界の樂園である、櫻の國である、美の國である、と云つ
て。この側の人は新聞記者や文士に多い。一方の側で
は、悲觀説を吐く。天惠薄き國、緯度の低い割合に寒冷な
國、多濕多雨の國等々。これ等は幾分氣象學を知つて居
る側の人々で、或は農學者、或は衛生學者といつた方面の
人である。

しかし私から見れば、何れも幾分かは根據はあるが、ま

○さらに

○兼備する

バサデナ
アメリカ合衆國カリ
フォルニア州。



富士山

たどちらも間違つて居ると思ふ。風光明媚には相違ない。富士の山の様なものはさうざらにあるものではない。我が國の如く海山の景色を兼備して居る國はさう澤山はない。しかし樂園とか花園とかいふは當らない。もつと華やかな國は他に澤山ある。バサデナのやうな所こそ眞に世界の花園のやうに思はれる。又この頃では菊の花を咲かす事は恐らく東京よりもロン

思へる

○御世辭
○齒の浮くやうな

○一途に

ドンの方が盛んのやうにも思へる。或はまた少くとも向島の櫻よりもワシントンの櫻の方がよごれて居ないやうである。

外國人は由來御世辭がうまい。觀光團の人などの齒の浮くやうな御世辭をいゝ氣になつて書き立てるのは、まことにおめでたいことである。

しかしまた一途に天惠薄き國と悲觀するのも當らないと思ふ。よく聞かされるのは、西洋は夏乾いて、冬は濕つて居る。それだから大變衛生上よろしいが、日本は夏暑く且つ濕つて居る爲に、蒸し暑く衛生上非常に悪いといふ。それも一理あるが、もし日本でこの夏の温度はそ

○匹敵する

乾いて

榮え

堪へ難い

輕井澤
長野縣東部高地の
町、避暑地として名
高い。

のまゝにして置いて、空氣が歐洲各國と匹敵する程度の水分しか持たなかつたらどうであらう。それこそ動植物共に乾いて枯れて、あのペルシヤ・アラビヤなどに見る様な沙漠又は荒野となることは免れ難い事である。又もし夏の暑さを取り去つたならば、東京の近郊にも白樺が榮え、水田の代りに牧場が出来ることであらう。土地からの收穫は日本アルプス上高地邊または北海道十勝原野の程度に低下するであらう。

西洋人には、濕氣の多い暑氣は、殊に堪へ難いものである。だから六月頃からもう既に涼しく乾き勝ちな輕井澤の様な所へ逃げる。しかし吾々は體質が違ふのであ

○呪ふ

與へる

言うて

るから濕氣の多い夏を呪はなくともよいのである。まことにこの夏の暑氣が、吾々に米や味噌やその他主要な農産物、食物等を與へるのである。風光の明媚と云ふことの裏は耕地が少いと云ふ事で、英本國と總面積において略等しい日本が、耕地においてはその五分の二程しかない。即ち恵まれたりと世間で言うて居る點こそ恵まれない點である。しかしこの五分の二の面積の耕地からの農産物の産額は、英本國に倍するものである。従つて食料品を外國に仰ぐ量は彼に比して極めて少い。これは夏が暑くて多濕で従つて作物の優勢な爲である。即ちその恵まれないと云ふのがかへつて恵まれた所以

そろへて

〇一轉する

である。

梅雨の如きに至つても正にその通りである。東京の人達が鬱陶しい天氣だ、いやにじめ／＼した天氣だと口をそろへて嫌ふこの梅雨なるものも、これ有るが爲に稻の移植が出来、その爲にマレイ邊のばら蒔に比して數倍の收穫を増して居る事を思へば、吾々は梅雨に對して絶大の感謝を捧げて良いのである。しかしその感謝は一轉して吾々祖先に向けられねばならない。

梅雨こそ右の様な役に立つものであるが、その利用法を知らない人々に對しては、やつぱりどこまでも嫌なものであるに相違ない。我々の祖先は英語の本から田

〇乃至は

〇春寒料峭

考へ

廣重
浮世繪師、安藤氏、
安政五年歿、年六十。

植を學んだのでもあるまい。乃至は佛教の經典からでもない。我が國の冬が寒く、従つて春寒の料峭たる不便



田植風景

を避けるために苗代を作ること考へ、その移植に梅雨を利用したものである。廣重の畫などにも田植といへばものと笠とがつきもので

ある。あの田植、俳句では早苗とり、これ等こそは西洋人にはわかるまいが、吾々日本人の最も美を感じる眞情景である。

(氣象と人生)

幸田露伴
文學者、文學博士、
元京都帝國大學講師、
帝國學士院會員、帝
國藝術院會員、文化
勳章受領者、名は成
行、東京の人、慶應
三年生。
○だに

一七 夏

休

幸田露伴

楽しき夏休は來れり。行李の紐は既に締めて、俥だに
來らば、今にも家に歸り得るほどに用意整ひし人もあら
ん。

○御身 給はん 數へて
楽しきは夏休にこそ。御身が父母は指折りて待ち給
はん。御身が兄弟姉妹は日を數へて待ち居りなん。御
身が今日の楽しみは、今年の楽しみの大いなるものの一
つなるべし。

越え
歸れ。飛ぶが如くに歸れ。野越え、山越え、はた海を越
えて歸れ。歸りて父母の家に心ゆるやかにして夏を過

せ。休むが爲の夏休なれば、心落著けて大いに休み、さて
來ん秋の九月に入りて勵み務むるの精力を蓄ふるぞよ
き。

○繁茂す
夏と云ふ語は「成立」の略にして、稻を始め種々の穀
物皆此の時に當り成長繁茂し、根を張り幹を伸べてやが
ての開花、結實の因を爲すをもて、しか呼ぶとぞ。

○生氣横溢す
此の頃南風快く吹き、烈日盛に照りて、天地の間に生氣
横溢す。されば千草萬木皆各勢づきて榮え誇るのみな
らず、鳥の聲は曉にいさみ、蟲の翅は夕にきほひ、魚も溯り
躍れば、貝も繁殖す。人も春より此の季に互りては、面
色も互え、身の力も張り、鍛鍊を加ふれば肉體は發達し易

加ふ

○きほふ

○生氣横溢す

○繁茂す

き傾あり。

○壯快

○沛然

○をかし

○詩趣

思へば夏の天地は誠に壯快なり。梢を渡る且の風、空に峙つ雲の峰、さては天の鼓の轟き循つて、雷雨の沛然として至るなど、何れかをかしからざらん。

綠蔭に書を讀めば、翠光詩趣と共に胸に沁み、小樓に箏を弾き已めば、檐の風鈴も清き音を和す。

いと暑くて苦しき日も、一庭の穢を掃つて、打水に夕の涼しさを招き、浴後を團扇片手にそゞろあるきしたるなど、其の楽しさは、冬は固より、秋にもはた味はふべからざるものあらん。

○そゞろあるき

○よろづ

よろづの家具どもを亂りがはしからず取片づけ、襖障

○口癖に言ふ
○荒ます

子開け放ち、さては廂まはり縁側など清らかに掃ひ拭き、汚れぬ衣著て、煩はしからぬ心持たらんには、夏は誠に好き時節なるべし。熱し苦しとのみ口癖に言ひて、我が務を怠り、或は晝寢に身を倦ませ、朝寢に心を荒ませては、夏ほど苦しき時はなかるべし。休み慰めんが爲の夏休なれども、意味なき怠に快からず長き日を暮さんは惜しむべし。夏季休暇の四十日、又これ御身が生涯の一部ならずや。

吉村冬彦
理學者、文學者、理學
博士、東京帝國大學
教授、本名は寺田寅
彦、高知縣の人、昭
和十年歿、年五十八。
○厄介

○城址
○日盛り
○行商人
洗うた

一八 棟の花

吉村冬彦

一夏、脳が悪くて田舎の親類の厄介になつて、一月ぐら
ゐ遊んでゐた。門前には清い小川が音を立てて流れて
居る。狭い村道の向側は一面の青田で、向ふには徳川時
代以前の小さい城址の岡が見える。古風な屋根門のす
ぐ脇に、大きな棟の木が茂つた枝を擴げて、日盛りの道に
涼しい蔭を作つてゐる。通りがかりの行商人などが、よ
く門前で荷を下し、その流で顔を洗うた濡手拭を口に
啣へて涼んで居ることがある。

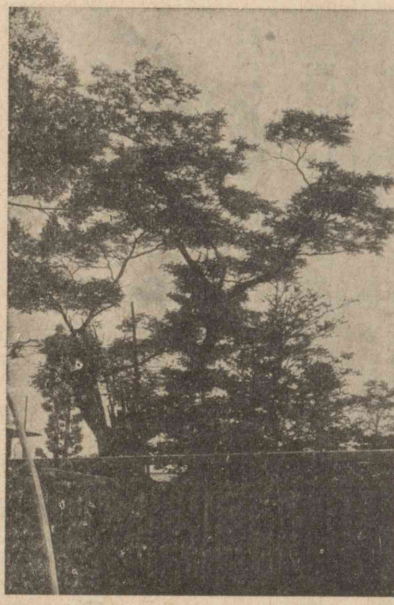
一日、暑い盛りに門へ出たら、樹蔭で桶屋が釣瓶や桶の

掃いた

○一癖ありさうな

振うて

簞たがを嵌めてゐた。綺麗に掃いた道に、青竹の削り屑や鉋
屑が散らばつて、棟の花がこぼれて居る。桶屋は黒い痘



棟

痕のある一癖ありさう
な男である。手拭地の
肌著から黒い胸毛を現
して、逞しい腕に木槌を
振うて居る。槌の音が
向ふの岡に反響して、靜

かな村里に響きわたる。稻田には強烈な日光が、眩しい
やうに射して、田圃は暑さに眠つて居るやうに見える。
其處へ羅宇屋が一人來て、桶屋の側へ荷を下す。古いそ

穿いて

して小さ過ぎて胸の合はない小倉の洋服に、腰から下は股引、脚絆で素足に草鞋を穿いて居る。古い冬の中折を眉深に冠つて居るが、頭は綺麗に剃つた坊主らしい。「今日も松魚が捕れたのう。」と、羅宇屋が話し掛ける。桶屋は、「捕れたかい、此の頃はなんぼ捕れても、みんな蒸氣で上へ積み出すからこちらの口へははひらんわい。」と、やけに桶をぼん／＼と叩く。

○やけに

門の屋根裏に巢をして居る燕が、田圃から歸つて来てまた出て行くのを、羅宇屋は煙管を啣へて感心したやうに眺めてゐたが、「鳥でも燕ぐらゐる感心を鳥は先づないね。」と前置して、こんな話を始めた。「村の或舊家に燕が

○前置する

生えた

昔から巢をくうてゐたが、一日家の主人が燕に向かつて、『お前は永年うちで宿を借りて居るが、時たまには土産の一つも持つて來たらどうだ。』と戯にいつた事があつた。そしたら、翌年燕が歸つて來たとき、丁度主人が飯を食つてゐた膳の上へ飛んで來て、小さな木の實を一粒落した。主人は何の氣なしにそれを庭へ投げ出したら、間もなく其處から奇妙な樹が生えた。誰も見たこともなければ、聞いたこともない不思議な木であつた。其の木が成長すると、枝も葉も一面に氣味の悪い毛蟲がついて、見るも淺ましいやうであつたので、主人は此の木を引き抜いて、風呂の焚附に切つて了うた。其の時、丁度町の醫者が通

了うた

○歎息する

りかゝつて、『それは惜しいことをした。』と歎息した。
『どうしてか。』と聞いて見ると、それは我が國では得難い
沈香といふものであつたさうな。此處まで一人で喋つ
て了つて、尤もらしい顔をして、煙を輪に吹く。ほん／＼
と桶を叩きながら黙つて聞いてゐた桶屋は、此の時一寸
自分の方を見て變な眼付をしたが、「そして、その沈香と
いふのは其の樹のことかい、それとも又毛蟲かい。」と聞
く。「うゝん、そりやあ、其の沈香にも亦色々種類があるさ
うでのう。」と、どちらとも分からぬことをいふ。桶屋は
強ひて聞き返さうともせぬ。桶を叩く音は向ふの岡に
反響して、棟の花がほろ／＼とこぼれる。

(藪柑子集)

返さう。

○反響する

一九 天の河

山本 一清

山本一清
天文學者、理學博士、
元京都帝國大學教授
滋賀縣の人、明治二
十二年生。

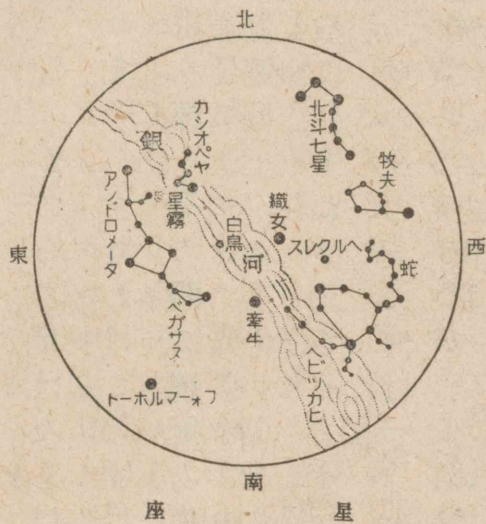
○とりわけ

涼みがてらの星ばなしは、誰でも經驗するところであ
ります。とりわけこの頃は、天空に牽牛織女の二大星が
白く輝き、その間に、蜿蜒と南北にかゝつてゐる天の河の
壯觀は、七夕の美しい話を知らない人にさへ、言ひ難いよ
ろこびをおぼえさせます。

夏の夕の天の河は、「南北に」とよく人がいひますが、正
確にいふと、南北ではないのです。正しい北方には、例の
北極星が、年が年中一定の位置に輝いてゐます。この北
極星にむかつて、少しく右手の低い地平線から、天の河は

○壯觀
おぼえ。

唱へ。



始るのです。それからだん／＼頭上へ延びてくると共に、その幅がひろがります。日本の中央部で、ちやうどまつすぐに、我々の頭の上につてゐる一等星が、即ち琴座の首星で、西洋人は、これをベエガと呼び、支那では、昔から織女と唱へました。眼を轉じて、琴座の東南を見ますと、廣くひろがつた天河をへだてて、そこに大きな白星が一つかゝやいてあります。これが例の七夕の話で、織女に配される牽牛であります。

ります。

天河は月の明るい夜には、全く消えてしまふやうな薄い光の帯であります。月のない夜には、その眞の壯大さが十分に表れます。その幅の或は狭く、或は廣く、光の程度も濃淡さまざまで、長く南北に續く有様は、全く洋々たる大河の流を見る様で、燦爛たる星の瞬きもさながら漣のやうに思はれます。

あゝ神祕なる天河。何故にこの不可思議なものが天に横たはるのか。これは實に昔から、いづれの國人も抱いた、一つの深い疑問でありました。機械の力のない昔の人は、この雄大なる河筋がすべての星と同じ歩調で、

消えてしまふやうな

○洋々たり

○さながら

○神祕

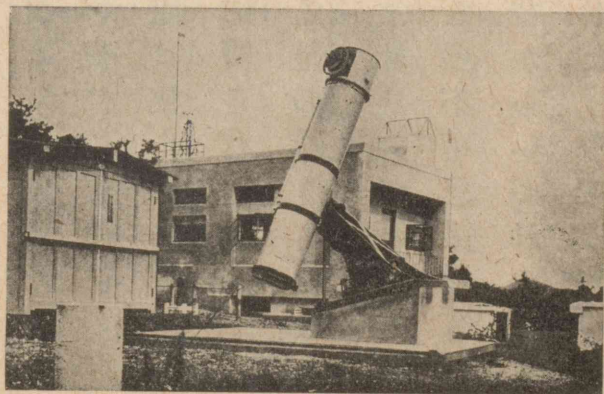
抱いた

○見破る

晝夜四季の運行をするといふ事實を知つただけで、その本體を見破る事は出来ませんでした。

十七世紀のはじめ、新學の開拓者として世界を驚かした偉人が、ガリレオは、望遠鏡を用ひてはじめてこの千古の謎を解きました。ガリレオが用ひた望遠鏡は、今から見れば、眞にあはれなものでありましたが、それでも天の河は、一つ一つの微星の密集團であることが、疑なく認められま

ガリレオ
天文學者、物理學者、
伊太利人。(西紀一五
六四—一六四二)



鏡遠望の測觀體天

した。

ガリレオ以來今日まで、天文家は繰返し々々天の河を観察しました。その中で、ウィリアム・ハーシェルが、最も偉大なる効を挙げました。ウィリアムは、空の星の數を數へ盡くして、始めて天のすべての星數が、天の河へ近づけば、近づく程増加する事を知りました。そして、その極端に増したものが、天の河そのものであるといふ事を知つたのであります。然らば、星は何故に天の河へむかつて集中してゐるのでせうか。ウィリアムの説によれば、吾人の知つてゐるこの大宇宙は、幾億の星の集團體で、その集合の形は、平板上に擴つたものと考ふべきである。

ウィリアム・ハー
セル
天文學者、英國人。
(西紀一七三一—一八三三)

○極端に

○透視する

そしてわが太陽系は、全體のおよそ中心に位置を占めてゐる事になつてゐる。この平板上に集つた全體の形を奥行の長い方に深く透視したものが、我々からは天の河と見えるのであり、それに反して、天の河から最も離れた方角が、星の重なり方の最も浅い、即ち奥行の短い方面であるといふ事です。

ウィリアム以後今日まで、多くの學者が繰返して天の河と、その中にある星の並び方とを研究しましたが、やはり大體の觀念は、今もなほ、ウィリアムの考と變りません。然し、更に精細に觀察すると、幾多の疑問があつて、天の河は、たゞ簡單に集つた星の團體ではないらしくも思はれ

○精細

るのです。古い昔からの謎であり、又今日もなほ解くあとからあとからと、新しい謎の増してゆく、實にこの天の河ほど不思議なものはありません。

夏の夜空を眺めながら、古い昔の天文のことを考へ、また遠い宇宙のはてを思ひうかべながら、天の河を見るのも、人間ばなれのした面白いものです。天の河を見るのに、澄みきつた夜の肉眼の眺も壯大を感じてありますが、雙眼鏡をもつ人は、それで天の河のあちらこちらを見ると、星の集り方の多少や、輝きや、濃淡の區別なども、一層はつきりとして、それだけ宇宙そのものに接近したやうな心持になります。

(週刊朝日)

考へ

○はて

熊田葦城
文學者、名は宗次郎、
廣島縣の人、文久二
年(二五二二年)生。

二〇 青磁の鉢

熊田 葦城

○仁慈

○逸品

直女は美濃岩村藩の老臣荻山某の女なり。才あり、智あり、仁慈の心特に深かりき。直女の父盆栽を好み、多くの奇樹珍木を集めけるが、中にも青磁の鉢に植ゑたる梅の古木、その器、その樹と共に天下の逸品として自らも誇り、人も稱ふるところなりき。

吠えて

一日、年若き婢女、庭に出でて、盆栽に水をそゝぎ、あたるに、飼犬の赤來りて、裾にまつはり袖にじやれつくに、婢女は戯に「しつゝ」といひつゝ、軽く逐へば、赤走り去りて、振り向きさま、一聲「わん」と吠えて、又飛び來る。婢女は

拾ひて

○途端
○あはれ

なほも「しつゝ」と叱りつゝ、小石を拾ひてちやうと投げつけたるに、その石はたと腰掛臺の角に當りて、横にそるゝ途端、忽ち戛然として響あり。あはれ青磁の鉢は二つになりて、左右に割れたり。

○齊しく

婢女見てあなやと驚き、鉢を見詰めしまゝ、あきれて立ちけるが、やがて我に返ると齊しく、一聲高くわつと泣き出しぬ。

○いぶかる

直女時に縁側に在りて、繪本を披き見つゝ、ありしが、婢女の泣聲を聞きて、いぶかりつゝ、庭に降りて傍に進み寄る。忽ち目に留りしは青磁の鉢。餘りの事に我を忘れて、その故を詰り問へば、婢女泣くく、仔細を語り、「いか

○仔細

○粗忽

○罪を購ふ

○途方に暮れる

に粗忽とは申せ、世にも稀なる御品を壊し候うては、死すともその罪を購ひ難し。いかにせば宜しきやらんと唯途方に暮れ候ひぬ。」と述べ、顔を掩ひて又さめくと泣く。

○わらは

直女聽きて心に憐れみ、首傾けて何事をか思案するこ
と少時。やがて「安心せよ。わらは善きやうに計らは
ん。」といひて、婢女を誡め去らしむ。

○出仕す

折しも父は出仕して家に在らず。夕刻に至りて歸り
來り、晚餐終りて後、直女を相手にいと機嫌よげに笑ひ興
ず。直女は父が最愛の女なり。父は愛嬌滴るばかりな
る直女の顔をのぞきて、「嬢よ、そちは父が大切な娘ぞ。」

○愛嬌

といひつゝ、頭を撫づ。

○まじ

直女は眞珠の如き眼を見張りて、じつと父の顔を見上
げ、「さやうにてはおはすまじ、わらはよりは青磁の鉢こ
そ、ひとへに御大切におはすべけれ。」といひつゝ、莞爾と
笑む。

○莞爾と

父はからくと笑ひ、「何とてさやうの事あらん。」と
いへば、直女「さらば彼の鉢わらはに賜はり候ひなんや。」
と言ひ出づ。父は幾たびかうちうなづき、「お、お、そ
ちの望むものは、何にても取らすべし。」とてますます機
嫌よし。

○しりへ

今は心安し。直女しりへに侍る婢女を見返りて、「そ

○よな
○こたび
○平伏す

○復

れ早くお詫び申せ。」といへば、婢女恐るゝにじり出で、
兩手を突きて頭を下ぐ。直女傍より共に詫ぶれば、父は
たと膝を拍ちつゝ、「さてはこれなる女め、青磁の鉢をこ
はせしよな。好しく、こたびは赦しやらん。」と告げ、前
に平伏せる婢女を見遣りて、「そちはよき主人を持ちて
仕合はせぞ。以來よくくゝ氣をつけよ。」と誠めしばか
り、復その罪を問はず。

婢女はうれし涙に咽びつゝ、幾回か主人を拜し、直女を
拜すれば、直女亦うれしさ餘りて、わつと泣き崩る。直女
時に年十三ばかりなりき。

(少女美談)

二 汝の母

姉崎 正治

姉崎正治
宗教學者、文學博士
東京帝國大學名譽教
授、帝國學士院會員、
號は嘲風、東京の人
明治六年生。

追うて

○物の哀

英國の一飛行士官が、敵の飛行機を射落した時のこと
である。彼は敵機の地上に落ちるのを見るとともに、そ
れに乗組んでゐる敵兵のことを思ひ、敵の塹壕の前であ
るにも拘らず、敵機の跡を追うて著陸した。敵機は翼を
折つて壊れ、乗組士官は地上に横たはつて倒れ、呼吸は既
に絶えてゐた。敵ながら、今まで空中に飛翔してゐたこ
とを思ひ、物の哀を覺えて、その死骸を片付けてやらうと
して、胸のポケットの邊に手を觸れると、そこに堅いもの
がある。これを捜し出して見ると、一葉の寫眞で、それに

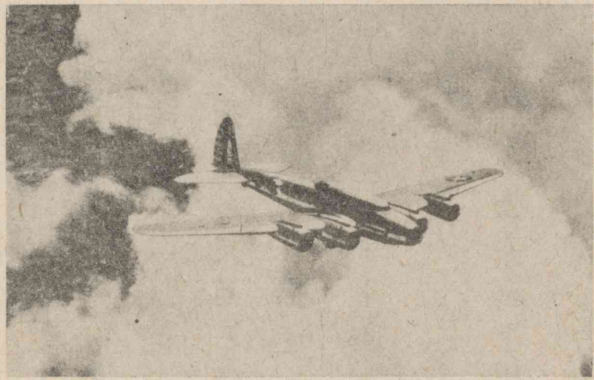
〇入

〇武運

は「汝の母」と書いてある。即ち今戦死したドイツ士官

は、空中戦にも常にポケットに「汝の母」の寫眞を藏してゐたのである。英國士官はこれを見て一人哀を催し、まづ敵の死骸を味方の塹壕に運び、再び機上の人となつて、また一戦した。かくて安全に武運めでたく味方の戦線の後に歸つた。

その後、英國士官はその日射殺した敵と、その老母とのことを思ひ、それにつけては、自分



戦 闘 機

〇感慨に堪へず

〇功名

の身の上、且早く亡くなつた自分の母のことを考へて、感慨に堪へず、敵士官の住所、姓名によつて、その母へ一書を送つた。その意味は大略次のやうであつた。

「私は英國の飛行士官です。今日私は敵機たるドイツの一飛行機を射落して、一つの功名を立てましたが、その敵兵が死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏してゐたのを發見し、その母御たるあなたにこの手紙を差出します。

私はあなたの御子息を殺しました。しかし御子息を憎んでのことでもなければ、また御子息の母御たるあなたのお悲しみを知らないのでもないことは勿論で

○殘忍

○偵察する

失はれた

○敬意

○無量の感

す。たゞ戦争といふ殘忍な仕事に於いて、これは私の義務だつたのです。敵士官、即ちあなたの御子息が、味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られました。な、その結果、味方は必ずやそれだけの攻撃を受けて、味方の兵何人かの生命はその爲に失はれたでせう。この不幸を防ぐため、私は敵機を射落しましたが、その乗組士官の死骸に敬意を表し、それを取りかたづけようとする時、その人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

私は子供の時母に死別れ、今でも母御のある人を羨ましく思ふのですが、その私が殺した敵士官には、あなた

○とし

○悲痛

いらつしやる

といふいとしの母御がゐられ、死ぬ迄その母御の寫眞を抱いてゐられたのを見て、私はじつとしてゐられな、い感じがします。御子息は既にこの世の人ではありません。あなたもこの知らせを得て、今頃はさぞ悲痛に沈んでいらつしやるでせう。御子息を殺した私が、あなたに手紙を差上げるのは、殘忍だと思ひでせうが、しかし、私としては、あなたに對して、丁度自分の母に對するやうな親しい感じを、悲しみの中にも禁ずることが出來ません。

私は御子息を殺しました。しかし、今私があなたの寫眞を前に置いて、あなたにこの手紙を書く時には、亡き

御子息があなたに向かつて話をしてゐるのか、また私が自分の亡き母に向かつて手紙を書いてゐるのか、私には區別がつかず、筆先に涙がはら／＼と流れるばかりです。

私が御子息を殺したのは、戦争といふ残忍な悪魔のしたことです。あなたも亦亡くなつたあなたの御子息も、このことを思つて、私の罪を許して下さるでせう。そしてまた御子息の亡くなつた代りに、私は一人の母を得たやうな思のあるのを察して下さるでせう。今私の書くこの手紙は、彼の人と私の二人の魂——殺された彼の人と、殺した私の真心——が一緒になつて書

思つて

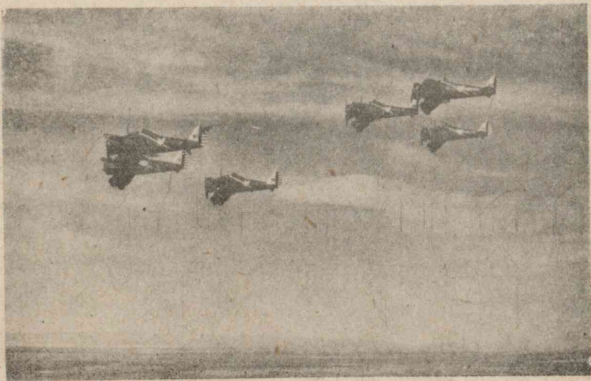
○涙の種

○大意

くのだと思つて下さい。もうこの上は何も書けません。涙で目は曇り、筆を執る手も顫へて書けません。」

この手紙は、英軍の本營から中立國の手を経て、ドイツ國內の宛名の人に届いた。一人の兒を失つた母がこれを讀んだ時の感じは、思ひやるさへ涙の種である。

さて、この婦人は數日の後、長い手紙を書いて、彼の英國士官へ送つた。その大意は次のやうであつた。



編隊飛行行

○通常

○述懐

○蘇生

「お手紙の届く前に、伴の戦死は知つてゐましたが、その戦死の相手たるあなたの情深いお手紙を見た時の私の思はお察し下さい。通常ならば、あなたを伴の仇としてお怨み申すところですが、御述懐に接しては、その仇が反つて伴の蘇生となつて、この母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが伴の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたのお手紙は、私にとつては討死した伴の手紙としか思はれません。あなたは伴を殺したといはれ、また事實それに違ひないことは勿論知つてゐますが、殺すも殺されるも、共に各の祖國のためで、

○違ひない

○明白

○畢竟

○因縁

人としては何等の怨も仇もある理由のないことは、お互に明白のこととせう。その怨もないものが互に殺さうとするのは、畢竟は戦争のためですが、これについては私は何も申しません。たゞ仇といふべきあなたが、私を母の如く思ひ、私にもまたあなたが死んだ伴の身代りのやうに思へるのは、なんたる不思議の因縁とせう。

私には三人の男子がありまして、戦死したのはその末子ですが、兄二人もやはり戦場に出てゐて、いつ弟と同じ運命に陥るか解りません。しかし、私は末子の戦死したために、あなたといふ新な子を得ました。戦争が

迎へる

いたゞきたうござ
います

濟んで平和の時が來、そして兄二人も無事に歸つて來
ましたら、私はあなたにこの家へ一度來ていたゞきた
いと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へ
るでせう。その時には、あなたは死んだ件とあなたと
二人分の子として、弟として、私の家庭にいつまでも滯
在していたゞきたうございます。私はその日の早く
來るやうに神に祈つてゐます。」
そして最後には、彼の寫眞に書いてある通りに「汝の母」
と書いてあつた。

(光 あ れ)

三 愛 國 心

大 島 正 徳

大島正徳
教育家、東京帝國大
學講師、神奈川県
人、明治十三年生。

○差 異

○延 び 延 び

○蓋 し

○盲 目 的

就 いて

社會を成して生活するのは人の本能である。隨つて、
その住む處の社會乃至國家を愛するのも、亦人の本能で
ある。如何なる國民もその國を愛せぬものはない。そ
の方法、その程度には多少の差異はあらうが、國を愛する
といふ心に於いては、何れの國民も變りはない。その家
族朋友を愛し、その郷土を愛し、延びてはその民族全體を
愛するのは、蓋し人情の自ら然らしむる所であらう。
併し、國を愛すると言つても、たゞ盲目的にこれを愛す
るのではない。各の國民は、その國家に就いてそれ

全うする
立國の大義
辨へ。

君主國體

天壤無窮の皇運を
扶翼する
顯彰する

ぞれ自覺する所がなければならぬ。それ故、吾々日本人は、この愛國心を全うするためには、立國の大義を明かにし、國體の特徴を辨へ、さうして國體の精華を永遠に發揮することに努めなければならぬ。吾々日本人はこの日本といふ國家を離れ、日本の國史を離れては、日本人たるの意味をなすことが出来ない。わが國が君主國體として萬世一系の天皇を戴き奉り、血族親愛の關係に於いて萬國無比の國を成してゐることは、吾々國民の光榮とする所であつて、この天壤無窮の皇運を扶翼することは、實に吾々臣民の本分であり、且つ吾々の祖先の遺風を顯彰する所以である。

排外心

嚴然たり

平和
大正八年世界大戰の
平和に復したること。
公是

しかし、愛國心に就いて聊か注意すべきは、それが徒に國自慢となつたり、排外心となつたりしてはならぬことである。如何なる國も各嚴然たる一大存在であるから相互の國家の間に敬意を拂ふべきは當然である。自國を尊ぶの餘りに、他國を卑しんではならぬ。大正天皇の平和宣言の大詔にも、

進ミテハ萬國ノ公是ニ循ヒ世界ノ大經ニ仗リ以テ
聯盟平和ノ實ヲ舉ケムコトヲ思ヒ云々

と宣はせられてある。吾々は日本國民として、わが君主國體の最も美しく、最も貴いことを信じ、わが國家の隆盛發展を圖ることに努力すべきは當然であるが、それだけ

○非議する

らと言つて、他國の國體を猥りに非議してはならぬ。米國人はその民主共和の國體を米國人に取つて最も良きものとして、これを大切に思ひ、英國人はその君主國體を英國人に取つて最も良きものとして、これを尊んでゐることを否認すべきではない。各の國家には各の歴史があり、特徴があり、又各の國民が各の國家を愛する念慮に於いて變るべき筈がないからである。恰もどの家の子もその家を愛する念に於いて變りがない筈であるのと同じである。故に、互に各、その家を愛する心を尊重するが如く、相互にその國を愛する心をも是認し尊重すべきである。

○念慮

○否認する

○是認する

○環境

各の國家は歴史を異にし、環境を異にし、民情を異にしてゐる。日本國民の歴史は米國民の歴史ではない。故に、吾々はわが國體美を尊び、これを永遠に發揮することに努力しなければならぬが、彼等米國人がその建國の美を誇り、これを永久に維持しようと努めることを、不都合だと非難すべき理由はない。彼等が國民として當然の心掛を持つことに、敬意を拂ふのは當然である。これが國際的良心とも言ふべきものである。これが有つてこそ萬邦協調して、世界文明の上にその特色美を競ふことが出来るのである。

又、國民は自國民の長所や特質を自覺すると共に、その

維持しよう

○協調する

○自警する

缺點や短所に就いても十分に自覺し、自警するの心掛が必要である。何事につけても、自ら省み、己の短を知つて改善して行くものは、必ず向上の途を進むことが出来るのであつて、一國民としても、その國民生活に就いて、長所や美點を自覺すると同時に、缺點や短所をもよく覺り、自ら戒めるのは、その國民生活を向上せしめる所以である。かやうに考へて來ると、わが國民の道徳意識に就いて、今後大いに改善すべき點はないであらうか。わが國の風俗習慣、生活法に就いて改善すべき餘地はないであらうか。此等の事柄に就いて深く省み、戒め、進んで改める所がなければなるまい。

○餘地

○貢獻

顧みるに、學問や技藝に關して、從來わが國民の間から如何なる大思想、大發見、大發明が出たであらうか。又、世界文明の上に如何なる貢獻をなしてゐるであらうか。勿論、西洋と交際して、彼等の文明に接したのは、まだ日の浅いことであるから、彼等の文明を吸収し消化するに忙しくて、未だわが國の特殊の文化を發展させて、世界に光被させるまでに至つてはゐないとしても、既に明治維新以來六十餘年の歳月を経た今日に於いては、吾々は自ら發憤努力して、進んで世界の文明に寄與するの覺悟がなくてはならぬ。

○光被させる

○發憤する
○寄與する

(公民道徳)

二三 兒獅子の自覺

松村 武雄

松村武雄
英文學者、神話學者、
文學博士、浦和高等
學校教授、熊本縣の
人、明治十六年生。

○氣を引く

兒獅子が、或日母獅子の眠つてゐる間に、森の中で遊び
戯れてゐた。種々變つたものが氣を引くので、兒獅子は
一寸探検をして見ようといふ心になり、自分の家からは
なれた大世界はどのやうなものか見たいと思つた。や
がて兒獅子は遠くにさ迷つて歸路を見失ひ、いつの間に
やら迷兒となつてしまつた。

○せんすべもない
○恰もよし

兒獅子は驚いて氣も狂はしく八方に走り廻り、悲鳴を
擧げて母を呼んだが、母の答はなかつた。疲れ果て、せん
すべもなくなつた時に、恰もよし、此の頃兒を失つた羊が

○薄氣味悪い

○了解する

通りかゝつた。羊は憫な啼聲を聞きつけ、兒獅子の近く
に來てやさしく世話した上、遂に養子として引取つた。
羊は此の迷兒をかはいがつて育てたが、其の内にそれ
が羊よりも大きくなり、時には何だか薄氣味悪く見える
やうになつて來た。其の眼の底には羊の了解しかねる
不思議な光さへ見ることが度々であつた。

○當分の間

○勇姿

當分の間は、養母と養子と共に幸福な月日を送つてゐ
たが、或日向ふの山の彼方に大きな一頭の獅子が勇姿を
現した。ふさ／＼とした鬣を打振つて、谿谷に鳴り響く
吼聲を擧げた。母の羊は恐れて立ちすくんだ。

然るに此の不思議な音響が兒獅子の耳に達した時、彼

○魔に打たれたやう

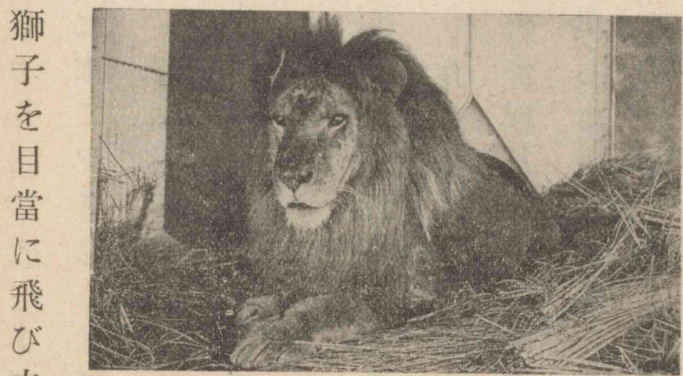
○胸の琴線に觸れる

○新生の力

○無意識

は魔に打たれたやうになり、これまで曾て覚えのない感

じがして、全身がわな／＼と慄へ
上るやうな氣がした。



獅子

獅子を目當に飛び去つた。

其の獅子の吼は兒獅子の胸の
琴線に觸れ、これまでに無い新し
い力を生ぜしめたやうに感じた
のであつた。此の不思議な力こ
そは、彼に靈覺を與へたる新生の
力であつた。彼は無意識に吼り
かへした。さうして向ふの山の

○自覺

羊と思つて、犬にも狼にも震へてゐた彼に、獅子として
の自覺が起つた時、彼の中から全く新しい力が湧き上つ
た。獅子の生涯が始り、獅子の自由、獅子の威力、獅子の山
野が彼のものとなつた。

我等のうちにも眠れる獅子の性格がある。只問題は
如何にして之を呼び醒すかである。人間の中には人間
ならぬ貴いものが眠つてゐる。特別の事變が、特別の靈
感が、その人間ならぬものを搖り動かす時、そこに驚くべ
き神性が現れて来る。羊と思つたものは驚く。奇蹟とい
ふ。併し、それは潜在せる神性が、神性としての自由を
發揮したに過ぎない。

(「マーデン」如何にして希望を達すべきか)

○潜在する

○奇蹟

○靈感

○マーデン

米國の學者。

(西曆一五〇一—一五二)

野口英世

幼名清作、後英世と改名、ドクトル・オウリサイエンス、醫學博士、理學博士、ロックフェラー醫學研究所正員、帝國學士院會員、福島縣の人、昭和三年歿、年五十三。

○無心
○不具

○氣を配る

二四 少年時代の野口英世

奥村 鶴吉

貧しい中にも強い母の愛に包まれて、清作は健かに生立つた。しかし、清作が同じ年頃の子供等と無心に遊ぶ様を見る度に、あゝ、あの手をどうしようと、母の心は暗くなつた。

清作も成長するに随つて、自分の不具を覺つた。何をするにも右手しか使へないことが、幼心にも悲しく恥づかしかつた。そして自然その手を著物の間や帶の下に隠さうと氣を配るやうになつた。が、心無い遊仲間、清作が隠さうとすればする程、無理にもその手を見つげ出

○嘲弄

○さすがに

○奮然

○締めよう

して嘲弄の種にした。清作は平素は温和な氣質であつたが、悪童共にからかはれる時は、さすがに堪へ切れなくなつて、奮然として



野口英世

子供等に飛びつき、胸ぐらを取り、喉首を締めようとする。ことさへあつた。それでその場はを

さまつても、後では悪童共のからかひが一層激しくなるばかりであつた。それを見る度に、母は人知れず涙を流した。そして、百

○身を粉に砕く

姓の子で百姓の仕事さへ出来ぬ我が子のために身を粉に砕いても、學資を作つて學問を仕込んでやらねばならぬと堅く決心した。

三和小學校
福島縣耶麻郡翁島村
に在つた。

清作は八歳の春、村の三和小學校に入學した。清作は

○嘲り辱める

いとふ。

好きな勉強をすることは喜んだが、こゝでも心ない級友等が、運動時間などにその不自由な手を嘲り辱めるので、次第に學校に行くのをいとふやうになつた。然るに母は終日我が子のために働いて、毎晩遅く、疲れ果てて歸るのである。清作はその姿を見て、せめて筆墨料だけでも自分の手で儲けて、母の手助をしようと思ひ立つた。そこで彼は夕方、田の間を流れる小川に竹で編んだうづほ

しよう

○未明

泥鰌



○身を立てる

をかけて置いて、翌朝未明にそれを引上げ、その中に入つてゐる泥鰌をとつて、入用のありさうな家を尋ねて賣り歩いた。

母は清作の様子に心を痛めて、或夜清作を呼び、

「お前は學問をして身を立てねばならぬ。そのためにわたしは辛い働もしてゐるのだ。泥鰌賣をする暇になぜ勉強して偉い人になつてくれぬ。」

○負けじ魂

○嘲笑

○一心不亂

と涙ながらに言ひ聞かせた。「よしつ、勉強して偉い人にならう。」と彼本來の負けじ魂が目覺した。以後、清作は一日も學校を休まずに、友達の嘲笑も風と聞き流して、一心不亂に學業を勵んだ。

○めきくと

○拔擢する

猪苗代湖附近



○拔群

○慇懃

清作の努力は學校の成績の上にもめきくと現れ、中等科五級の時には、級長に拔擢せられ、更に尋常四年の時には、全校を通じての生長として、手不足な教師を手傳つて生徒を教へることになった。そして尋常科卒業の際は、成績拔群のため、特に縣廳から褒狀を授けられた。母の喜びはいひやうもなかつた。
清作は尋常小學校卒業の際、試験委員として出張した猪苗代高等小學校の首席訓導小林榮氏に見出され、同氏の懇な慇懃と助力とによつて、猪苗代高等小學校に入學することになった。時に年十四、明治二十二年四月のことであつた。

○裕福
○極貧
○驚倒に値する

三城潟
福島縣耶麻郡翁島村
大字三ツ和字三城潟
猪苗代湖の北岸に在る。

○窮境
○通ひぬいた

當時この地方では、尋常小學校を満足に卒業する者さへ少い位で、高等小學校に入學するのは裕福な家庭の子女に限られてゐた。随つて、極貧の清作が高等小學校に入學したといふことは、村の人々にとつては驚倒に値する事實であつた。

三城潟の清作の自宅から猪苗代町までは往復三里の道程である。殊に冬になると、強い磐梯山嵐の吹雪に捲きこまれたり、猪苗代湖から吹いて來る烈風に吹き飛ばされたりすることも珍しくはない。が、清作は、幼少から窮境に處して鍛へられて來た忍耐力と、天性の負けじ魂とを以て、雨の日も風の日も一日も缺席せずに通ひぬいた。

○貧窮

○辛苦をよそに見る

た。

しかも貧窮は、彼に通學以外の餘暇を、その好きな勉學のために費すことを許さなかつた。母思ひの清作は、この頃となつては、如何にしても母の辛苦をよそに見てゐることが出来なくなつた。そして不自由な手にもなし得られるだけ、農耕の手助や行商の品の手入をしようとした。又、時には幼い弟の守をしたり、冬籠の用意のため、山へ柴刈に行つたりした。

その頃小學校に於いて、最も生徒を苦しめたのは漢文であつたが、既に獨習で日本外史を通讀し、更に十八史略を讀んでゐた清作にとつては、むしろ易々たるものであ

日本外史
頼山陽著、二十二卷、
漢文で記した武家時
代史。
十八史略
元の曾先之の撰、史
記以下宋史に至るま
での十八史の事實を
摘録した書。
○易々たり

○讀破する

○異數
○上達

○涉獵する

○傾聽する

○想を纏める

○匹敵する

つた。又英語はナショナル第三リーダーまでをもつてこの學校の全課程としてゐたが、彼は既にその第四リーダーを讀破してゐたのみか、博物學の原書等をも繙いてゐた程で、語學には異數の上達を示してゐた。

しかし彼の最も好む所は理科で、物理・化學などの參考書を涉獵して熱心に勉強してゐたので、教場内では、他の生徒のやうに筆記をすることなく、唯一語も聞き洩らすまいと熱心に傾聽してゐるのみであつた。

この外に、彼の得意としてゐた學科は作文であつた。彼は暇ある毎に少年雜誌などを讀んで、想を纏め、文を練ることに努めてゐたので、作文に於いても彼に匹敵する

○生
○非 來

者は級中に一人もなかつた。

かく生來の負けじ魂と非凡の精力とによつて、彼の學業は驚くべき進歩を示したが、如何ともしがたいのは、左手の不具であつた。人となつて以來十數年、これあるがために、彼ははいひがたい不便を忍び、耐へがたい恨を吞んで來たのである。どうかして物が握れるやうになりた、といふ切なる思は、時として、いつそ小刀で指を一本一本切り離さうかと思ふまで彼を焦立たせた。

高等四年の第二學期半の、或作文の時間のことであつた。彼は日頃胸に餘つてゐた悲痛な心情を綴つて提出した。擔任の小林訓導はこのいたましい少年の告白を

○悲
○告 痛 白

○衆 議

讀んだ時、同情の涙が潜々として紙面を打つた。

つゞいてこれを讀んだ職員は一樣に同情の念に動かされて、衆議は忽ち清作の左手に手術を加へてやらうといふ問題にまで進んだ。この文は更に模範文として同級生に示されたが、文中に流れてゐる限りない悲痛の情は同級生をも動かし、彼等は小林訓導の發議に應じて進んで醵金を申し出た。

○發 議
○醜 金
○結 晶

訓導は、職員生徒の同情の結晶たる十圓餘の金を以て、その頃米國から歸朝して若松市に開業してゐた、當時の開腹術醫、會陽醫院長ドクトル渡邊鼎氏の手術を受けさせた。その結果、清作の不具な左手も、僅かながら物を握

○動機

る自由を得た。

しかしこれが人類の恩人野口英世を世に送る一大動機にならうとは、何人が思ひ設けたであらうか。

○肝に銘ずる

彼は師友の温かい同情に感泣すると共に、今更の如く醫術の尊さが肝に銘じて、將来自ら醫者として立ちたいといふ一念が炎の如く燃え上つて來た。そして高等小學校を卒業するや、渡邊ドクトルに懇願して、書生として住みこませて貰ふことになつた。

○炎の如く

○懇願する

○脇目もふらず

清作は醫院の用務の合間々々に、脇目もふらずに醫學前期試験の諸學科を勉強し始めた。そして生來の強い氣根と、小學校時代から口癖となつてゐる三時間睡眠主

○氣根

義とをもつて、日夜を分かたずに働んだ。院長が夜中の一時、二時頃、何かの序にその室を覗いて見ると、彼がランプの光の下に、一心に醫書を讀んでゐることは珍しくなかつた。

○國交が斷絶する

○召集

○新參

○委任する

清作が會陽醫院に入つた翌年、日清の國交が斷絶して、院長は軍醫として召集された。院長は出征に先立ち、多くの門下生や書生に暇を出したが、年少且新參の清作を拔擢して、留守中の醫院一切の用務から、一家の會計まで之に委任した。

院長の留守中、患者の治療はしなかつたので、勉學の暇は十分あつた。清作はこの間に、醫學の研究はいふまで

○素養

もなく、普通學の素養をも豊富にした。特に獨佛語の進歩は著しく、醫書は殆ど皆原書で讀んでゐた。

○處理する

しかし院長の留守中の家事一切を處理するといふ委託任務は、まだ人情に疎い少年清作には重荷に過ぎて、その心勞は一通りではなかつた。家人の間に不和があつて、清作のなすことすべてが一部の人々からは悪意に解され、壓迫は日毎に募つた。清作は舊師小林校長——小林氏は當時千里小學校長になつてゐた——にその旨を認めて、辭職のことを相談したが、校長からは直ちにそれを不可とする旨の返事が來た。けれども清作の身邊には、益露骨に排斥の手が加へられつゝある。清作は更に

○心勞

露骨に

千里小學校
福島縣耶麻郡千里村
に在る。

○露骨に

再三書を寄せて、窮狀を恩師に訴へた。校長も彼の立場には内心同情を禁じ得なかつたものの、しかし一旦の過失は永久に消え難いものであることを思つて、嚴然として次のやうな意味の訓戒の手紙を寄せた。

○再三
○窮狀を訴へる
○内心
○嚴然

再三書を寄せて、窮狀を恩師に訴へた。校長も彼の立場には内心同情を禁じ得なかつたものの、しかし一旦の過失は永久に消え難いものであることを思つて、嚴然として次のやうな意味の訓戒の手紙を寄せた。

○信任

「數ある書生の中から、若齡の君に後事を託された院長の厚い信任に對しても、君はあくまでこの重任を果さねばならぬ。まして院長は國家のために、一身を捧げて出征されてゐる。何の緣故もない者でも、出征軍人に對しては、後顧の憂のないやうにするのが、國民としての義務ではないか。先生が凱旋されるまで、一意恩師御一家のために盡くせ。それはやがて自己を大な

○後顧の憂
○凱旋する
○一意

師御一家のために盡くせ。それはやがて自己を大な

○薄志

○斷行する

○克明

乞うた

○細大漏らさず
○記載する

○一些事をも忽にしない

らしめる修養でもある。唯々誠意を以て勤めよ。」
この手紙を手にした清作は、夢の醒めたやうに己の薄志を愧ぢ、以後あらゆる不快を忍んで、委託された使命を果すために、自己の眞なり善なりと信ずる所を斷行した。院長は二年にわたる出征を終へて、明治二十九年の春若松に凱旋した。清作は託されてゐた留守中の家事一切をありのままに報告し、留守中克明に記帳して置いた。「戦役中會計明細表」を提出して査閲を乞うた。この明細表には米屋八百屋の拂から、十五錢の草履、二錢の切手に至るまで、細大漏らさず英文で記載されてゐた。院長は今更ながら、清作が一些事をも忽にしない努力に感歎

を禁じ得なかつた。

○精根を盡くす

○就中

○蘊奥を極める

○遊學
○輕舉

○承諾する
○訓戒する

清作は、十八歳の初夏渡邊氏の門に入つてから既に四箇年、その間精根を盡くしてあらゆる學科の修得に勵んで來たが、就中醫學に於いては、已に醫術開業前期試験を受けるに十分な自信を持つやうになつてゐた。この上は一日も早く東京に出て斯學の蘊奥を極めたいといふ念慮を抑へることが出來ず、小林校長に宛て意中を残りなく認めて、東都遊學可否の意見を求めると、何事にも輕舉を厭ふ校長から、今は進んで遊學を賛成して來た。清作は早速院長に東都遊學を願ひ出た。院長も快くこれを承諾して、種々將來を訓戒し、手厚い餞別を贈つて

○門出

その門出を祝した。清作は受験準備の書類を背にし、希望にみちて、若松街道を東へ、六里に近い山道を、四年振に我が家へと急いだ。

祝ふ。

○往時

磐越西線
東北本線郡山驛から分岐し若松を経て信越本線新津驛に至る鐵道線路。

東北本線
東京・青森間の鐵道線路。

本宮驛

東北本線二本板・日和田兩驛の中間に在る。

○上り框

翌日清作は知己朋友に別れ、母と共に猪苗代の小林校長の宅へ別を告げに行つた。清作の門出を祝ふ楽しい晩餐を終つてから、小林校長夫妻と清作母子とは、往時の追憶や清作の將來について、夜の更けるまで語り合つた。校長は十二圓の月俸から十圓を割いて餞別とした。

その頃はまだ磐越西線が開通してゐなかつたので、上京するには、東北本線の本宮驛まで、九里の山坂道を歩かねばならなかつた。翌朝ほの暗い上り框に清作は草鞋

○未來

の紐を結んで、恩師と慈母とに送られ、花稻の香の高い曠道の朝露を踏みつゝ、町外れまで來た。湖面は今や未來の世界的大學者の前途を祝ふものの如く朝日に輝き初めてゐる。清作は、幼い子を訓すやうに何くれとなく上京後の注意を與へる恩師と、名残を惜しんで一町半町とついて來る慈母とに悲痛な別を告げ、遠い前途を望みつつ初秋の碧空にそゞり立つ濃紫色の磐梯山を後にした。

○名残を惜しむ

○そゞり立つ

磐梯山

福島縣猪苗代湖の北に在る火山、海拔一八一九米。

(野口英世)

聖代女子國語讀本 卷一終

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調查會發表) 昭和六年五月修正(千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不世丙並
 【一】中【、】丸主【ノ】之久乏乘
 【乙】乙九乞也乳亂【丁】了事【三】
 二互五井【十】亡交京亭亦【人】人
 仁仇今介仕他付代令以仰仲伴任
 伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余
 佛作伸使來佳例侍供依侮侯侵便
 係促俱俊俗保俠信修俳依俸併倉
 個倍倒候借偷假偉偏停健側偶傍
 傑備催勳傳債傷傾僅像僚偽僧價
 儀億儉償優【儿】元兄充兆兕先光
 克兌免兒【入】入內全兩【八】八公
 六共兵具其典兼【冊】冊再【元】元
 【シ】冬冷涼准凌凍【凡】凡【凶】凶
 出【刀】刀刃分切刊刑列初判別利

到制刷券刺刻則削前剛副剩割創
 劇劍劑【力】力功加劣助努効勅勇
 勉動勸務勝勞募勢勸勸勸勸【ク】
 包【ヒ】化北【區】區【十】十千升午
 半卑卒卓協南博【ト】占【印】印危
 却卵卷即【厄】厄厘厚原厥【去】去
 參【又】及友反叔取受【口】口古句
 叫召可史右司各合吉同名后吏吐
 向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命
 和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善喉
 喜喪喫單嗣嘉器噴嚴囑【囚】囚四
 回因困固國圍園圓圖團【土】土在
 地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基
 堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓塀增
 墨墮壁壇壓壤【士】士壯壹壽【又】又

夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫
 央失奇奉奏契奔奢奧奪獎奮【女】
 女奴好如妃妊妥妙妨妹妻姉始姑
 姓委姦姪姪姻姿威娘媼媼媼媼媼
 婚媒嫁嫡嫌孃【子】子字存孝季孤
 孫學【宅】宅守安宏完宗官定宜客
 宜室宮害宴家容宿寄密富寒察寢
 實審寫寬寶【寸】寸寺封射將專尉
 尊尋對導【少】少少尙【尤】就【尸】
 尺尼尾尿局居屈屈屋展層履屬
 【山】山岡岩岳岸岬峯島峽崇崎崩
 【川】川州巡集【工】工左巧巨差
 【已】已【巾】巾布帆希帝帥師席帳
 帶常帽幅幕幣【干】干平年幸幹
 【么】幻幼幾【床】床序底店府度座

庫庭庶康廉廓廢廣廳【延廷建】
廻【升】弄弊【弋】式【弓】弓引弟
弱張強彈【彡】形彩影影彰【彡】役
彼往征待律後徐徑徒得從御復微
徵德徹【心】心必忌忍志忘忙忠快
念怒思怠急性怨怪性恐恥恨恩恭
息悔悟悖患悲惟悼情惑惜惠惡情
惱想愁愉意愚愛感慈態慕憐憐憤憤
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲憶憾憤懇
應懲懷懸戀【戈】成戎戰戰戲戴
【戶】戶戾房所扇【手】手才打扱扶
批承技抑投抗折抱抵抑披抽拂拍
拒拓拔拘拙招拜括拈拈拈拈拈拈
捧描捨掃授掌排掛採探控推揚接
提換握插揭揮援損搖搖搗搗搗搗
擇擊操擔據擬擴攝【支】支【支】收
改攻放政故敍教敏救敗取散敬敵

敷數整【文】文【斗】斗料斜【斤】斤
斥斬新斯斷【方】方施旋族族旗
【无】既【日】日且旨早旬旭昇昌明
易昔星春昭昨是映時晚晝普景晴
晶智暇暖暗暑暮暴曆曇曜【日】曲
更書曹會替最會【月】月有朋服朕
期望朝期【木】木未末本札朱机朽
杉材村束柿杯東松板枕林枚果枝
枯架柄某染柔查柅柱柳粟校株根
格栽桃案桐桑梅條梨械栗棋棒棟
森棺植楠業極榮構概樂標標樞樞
樣樹橋機橫檝檢櫻欄權【欠】次欲
款歌歌歡歐歡【止】止正此步武歲
歷歸【歹】死殊殉殖殘【爻】段殺殿
毀【母】母每毒【比】比【毛】毛【氏】
氏民【气】氣【水】水水水汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河沸油治沼

沿沉泉泊法波泣泥注泰泳洋洗津
洪活派流浦浪浮浴海浸消涉液淑
淚淡淨淫深湜清淺添減淵渡淵淵
港渴湖湧湯源準溢潑濁滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕漢漢漢漢漢漢
潮澤激濁濃濕濟濱瀧灣【火】火灰
災炊炎炭烈無然煉煮煙照煩熱熱
燃燈燒營爆爐【爪】爪爭爲爵【父】
父【爻】爾【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物牲特犧【犬】犬犯狀狂狩狹
猛貓猶獄獨獲獵獸獸【玄】玄率
【玉】玉王玩珍珠玼現球理琴瓊璽
【瓦】瓦瓶【甘】甘甚【生】生產甥
【用】用【田】田由甲申男町界畏畑
畜畝略番畫異雷當疊【疋】疋疎疑
【疒】疫疲疾病症痘痛痲癩癩【火】
登發【白】白百的皆皇【皮】皮【血】

皿盆益盛盜盟盡盞盞【目】目盲直
相省眉看真眠眼着睡督【矢】矢知
短【石】石砂砲破研硬硯碇砬砬砬
磁磨礎【示】示社祈祕祖祝神稟祭
禁禍福禦禮【禾】秀私秋科秒租秩
移稅程稚種稱稻稿穀積穗穗【穴】
穴宀空突窈窕窳窮【立】立章童端
競【竹】竹竿笑笛符第筆等筍筒答
策算管箱節範築篤簡簿籍【米】米
粉粒粘粗粹粹精糖糞【糸】系紀約紅
紋納純紙級級紛素紉素紫累細紳紹
紺終組結絕絡給統統絲絹經緯維綱
網綴綻綿緊緒線締緣編緩緯練縛
縣縫縮縱總績繁織繕繪繭練纏續
【玉】缺【网】罪置署罰罵罷羅【羊】
羊美羣義【羽】羽翁翌習翼【老】老
考者【而】耐【表】耕【耳】耳聖聞聯

聲職聽【聿】肅肇【肉】肉肖肝股肥
肩育脾胃背胎胞胸胸能脅脈脊脚
脫腐腕腦腰腸腹膈膜臍臍臍臍臍
【臣】臣臥臨【自】自自臭【至】至致臺
【白】與興舉舊【舌】舌舍【舛】舞
【舟】舟航般舵船船艦【艮】良【色】
色【艸】芝花芽芳苑苗若苦莢茂茶
草荳荷莊莊菊菌菓菜華萬落葉著莖
蒙蒸著蔓薄藏藝藤藥【疋】虎虐處
虛號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠶
【血】血衆【行】行術街衙術術【衣】
衣表袂袋袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】見規視親
覺覽觀【角】角解觸【言】言訂計討
訓託記訟訪設許訴診詐詔評詞詠
試詩詰話詳誇誌認誓誕誘語誠誤
說課調談請論論諸諾謀諮講謝

諺謹謬證識譜警譚議護譽讀變讓
【谷】谷【豆】豆豐【豕】豕象豪豫
【貝】貝貞負財貧貨販賈責貯貳貴
賈貨費賈賈賈賈賈賈賈賈賈賈賈
賤賦質賴購贈贊【赤】赤【走】走赴
起超越趣【足】足距跡路踴躍【身】
身【車】車軌軍軒軟軸較載輕輦輪
輯輪輿轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰農
【毛】込迎近返迫迭迷迷追退退迷
逆透逐途通速造連週進逸遂遂選
運過道達達遙遙遞遠遠適適選選選
遣避還邊邊【邑】邦邪邸郊郡郡部
郵都鄉【酉】酌配酒酢醕醕醕醕醕
醫【采】釋【里】里重野量【金】金釜
針鈞鉤鉤鉛鉞銀鉞銅鉞銳鋒銅錯
錄錢鍋鎖鎖鏡鑄鐘鐵鑑鑄【長】長
【門】門閉開閑閑閑關【阜】防附

偽帯滯參慘兩滿勵賞國開園函壹

文語動詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	書	カ	キ	ク	ケ	ケ	ケ
上二段	起	キ	キ	ク	クル	クレ	キヨ
上一段	(著)	キ	キ	クル	クル	クレ	キヨ
下二段	兼	ネ	ネ	ケル	ケル	ケレ	ネヨ
下一段	(蹴)	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格	(來)	コ	ケ	ケル	ケル	ケレ	コヨ
サ行變格	(爲)	セ	シ	ス	スル	スレ	セヨ
ナ行變格	死	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
ラ行變格	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ

口語動詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	書	カ	キ	ク	ケ	ケ	ケ
上二段	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段	起	キ	キ	クル	クル	クレ	キヨ
下二段	兼	ネ	ネ	ケル	ケル	ケレ	ネヨ
下一段	(蹴)	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格	(來)	コ	ケ	ケル	ケル	ケレ	コヨ
サ行變格	(爲)	セ	シ	ス	スル	スレ	セヨ

文語形容詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	清	ク	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	涼	シク	シク	シ	シキ	シケレ

口語形容詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	假定
ク活用	清	ク	ク	イ	イ	ケレ
シク活用	涼	シク	シク	シ	シイ	シケレ

文語助動詞活用表

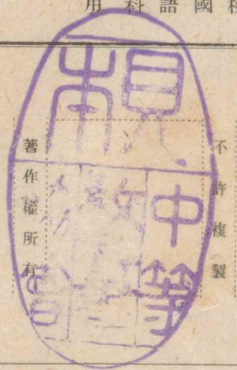
種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
受身	れる	れる	れる	れる	れる	れる	れよ
敬	さす	さす	さす	さす	さす	さす	さよ
使役	しむ	しむ	しむ	しむ	しむ	しむ	しよ
時	た	た	た	た	た	た	た
否定	な	な	な	な	な	な	な
推量	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま
比況	ごとし	ごとし	ごとし	ごとし	ごとし	ごとし	ごとし
希望	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし
否定	ず	ず	ず	ず	ず	ず	ず
時	む	む	む	む	む	む	む
推量	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら

口語助動詞活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
受身	れる	れる	れる	れる	れる	れる	れよ
敬	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さよ
使役	せ	せ	せ	せ	せ	せ	せよ
時	た	た	た	た	た	た	た
否定	な	な	な	な	な	な	な
推量	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま
希望	たい	たい	たい	たい	たい	たい	たい
否定	ない	ない	ない	ない	ない	ない	ない
時	よう	よう	よう	よう	よう	よう	よう
推量	まい	まい	まい	まい	まい	まい	まい

動詞	形容詞
<p>音便表</p> <p>一い音便 書きて 防ぎて い</p> <p>二う音便 言ひて 一う</p> <p>三撥音便 死にて 飛びて 積みて ん</p> <p>四促音便 立ちて 買ひて 破りて つ</p>	<p>一白き花 一い</p> <p>二甘くなる 一う</p>

日七十月一年三十和昭
文部省檢定
 高等女子學校國語科用
 實業學校國語科用



昭和十二年七月一日
 昭和十二年七月五日
 昭和十二年十二月十五日
 昭和十二年十二月二十日

印刷
 發行
 訂正再版印刷
 訂正再版發行

編纂者 吉澤義則

發行兼印刷者 星野敬一

京都市上京區丸太町通堀川西入
 西丸太町百七十一番地

京都市中京區丸太町烏丸西入

發行所 星野書店

電話上③一五〇・四九三・四九四番
 振替貯金口座大阪四九四九一番

聖代女子國語讀本 全十册

定價各卷金六拾錢

